

有価証券報告書

事業年度 自 平成29年4月1日
(第71期) 至 平成30年3月31日

阪和興業株式会社

有価証券報告書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

目 次

頁

第71期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	6
4 【関係会社の状況】	7
5 【従業員の状況】	9
第2 【事業の状況】	10
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	10
2 【事業等のリスク】	13
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	14
4 【経営上の重要な契約等】	20
5 【研究開発活動】	20
第3 【設備の状況】	21
1 【設備投資等の概要】	21
2 【主要な設備の状況】	21
3 【設備の新設、除却等の計画】	23
第4 【提出会社の状況】	24
1 【株式等の状況】	24
2 【自己株式の取得等の状況】	26
3 【配当政策】	27
4 【株価の推移】	28
5 【役員の状況】	29
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	33
第5 【経理の状況】	44
1 【連結財務諸表等】	45
2 【財務諸表等】	94
第6 【提出会社の株式事務の概要】	106
第7 【提出会社の参考情報】	107
1 【提出会社の親会社等の情報】	107
2 【その他の参考情報】	107
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	108

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成30年6月25日

【事業年度】 第71期(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

【会社名】 阪和興業株式会社

【英訳名】 HANWA CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 古川弘成

【本店の所在の場所】 大阪府中央区伏見町四丁目3番9号
(上記は登記上の本店所在地であり、実際の本社業務は、東京本社において行っております。)

【電話番号】 06(7525)5751

【事務連絡者氏名】 経理部長 渡辺安彦

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区築地一丁目13番1号

【電話番号】 03(3544)1225

【事務連絡者氏名】 経理部長 渡辺安彦

【縦覧に供する場所】 阪和興業株式会社東京本社
(東京都中央区築地一丁目13番1号)

阪和興業株式会社名古屋支社
(名古屋市中村区名駅一丁目1番1号)

株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第67期	第68期	第69期	第70期	第71期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
売上高 (百万円)	1,682,503	1,737,397	1,511,800	1,514,037	1,791,118
経常利益 (百万円)	14,698	14,264	15,424	22,907	25,502
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	7,896	9,086	25,469	16,363	17,354
包括利益 (百万円)	14,647	19,450	16,778	20,991	22,532
純資産額 (百万円)	125,361	142,749	156,139	171,637	203,700
総資産額 (百万円)	593,351	651,456	599,694	694,232	861,965
1株当たり純資産額 (円)	591.68	682.46	747.40	4,193.50	4,621.96
1株当たり 当期純利益金額 (円)	38.11	43.85	122.92	400.89	427.04
潜在株式調整後 1株当たり 当期純利益金額 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	20.6	21.7	25.8	24.5	21.8
自己資本利益率 (%)	6.6	6.9	17.2	10.1	9.7
株価収益率 (倍)	10.5	11.1	3.9	9.9	10.5
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	343	1,790	53,098	3,959	△19,755
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△5,244	△13,692	△10,446	△18,427	△39,971
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△4,927	19,339	△41,751	15,447	66,435
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	15,919	24,515	25,804	27,206	34,855
従業員数 (名)	2,610 [569]	2,772 [620]	2,977 [654]	3,155 [619]	3,576 [635]

- (注) 1 「売上高」には、消費税等は含まれておりません。
2 平成29年10月1日付で当社普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っております。第70期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益金額を算定しております。
3 「潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額」については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
4 「従業員数」の[外書]は、臨時従業員の年間平均雇用人員数であります。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第67期	第68期	第69期	第70期	第71期
決算年月		平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月	平成30年 3 月
売上高	(百万円)	1,486,219	1,518,494	1,281,287	1,283,953	1,490,680
経常利益	(百万円)	14,067	12,508	18,628	20,401	22,041
当期純利益	(百万円)	8,128	8,412	23,354	15,661	14,545
資本金	(百万円)	45,651	45,651	45,651	45,651	45,651
発行済株式総数	(株)	211,663,200	211,663,200	211,663,200	211,663,200	42,332,640
純資産額	(百万円)	122,915	136,575	151,347	165,761	177,650
総資産額	(百万円)	536,634	583,408	536,520	632,711	765,590
1株当たり純資産額	(円)	593.16	659.10	730.41	4,078.81	4,371.50
1株当たり配当額 (内1株当たり 中間配当額)	(円)	12.00 (6.00)	15.00 (7.50)	18.00 (8.00)	19.00 (9.00)	85.00 (10.00)
1株当たり 当期純利益金額	(円)	39.22	40.60	112.71	383.70	357.92
潜在株式調整後 1株当たり 当期純利益金額	(円)	—	—	—	—	—
自己資本比率	(%)	22.9	23.4	28.2	26.2	23.2
自己資本利益率	(%)	6.9	6.5	16.2	9.9	8.5
株価収益率	(倍)	10.2	12.0	4.2	10.3	12.5
配当性向	(%)	30.6	36.9	16.0	24.8	34.9
従業員数	(名)	1,161 [161]	1,169 [171]	1,216 [182]	1,272 [185]	1,306 [192]

(注) 1 「売上高」には、消費税等は含まれておりません。

2 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会において、当社普通株式について5株を1株に株式併合する旨の決議を行い、承認可決されました。これにより、株式併合の効力発生日（平成29年10月1日）をもって、発行済株式総数が42,332,640株となっております。

3 平成29年10月1日付で当社普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っております。第70期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益金額を算定しております。

4 第71期の1株当たり配当額85.00円の内訳は、株式併合前の中間配当額10.00円と株式併合後の期末配当額75.00円であります。

5 第71期の1株当たり期末配当額75.00円には、創立70周年記念配当10.00円を含んでおります。

6 「潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額」については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

7 「従業員数」の[外書]は、臨時従業員の年間平均雇用人員数であります。

2 【沿革】

昭和22年4月1日	大阪市東区に主に鉄鋼製品を扱う卸売業として設立 (資本金198,000円 本店：大阪市)
昭和23年12月	東京出張所(現・東京本社)開設
昭和27年11月	名古屋出張所(現・名古屋支社)開設
昭和38年8月	大阪証券取引所上場
昭和43年9月	HANWA AMERICAN CORP.(現・連結子会社)設立
昭和45年9月	東京証券取引所上場
昭和46年7月	阪和(香港)有限公司(現・連結子会社)設立
昭和47年4月	HANWA SINGAPORE (PRIVATE) LTD.(現・連結子会社)設立
昭和50年11月	ロンドン事務所(現・ロンドン支店)開設
昭和51年9月	HANWA THAILAND CO.,LTD.(現・連結子会社)設立
昭和58年7月	東京支社を東京本社に昇格、二本社制を採用
平成4年12月	台湾阪和興業股份有限公司(現・連結子会社)設立
平成6年1月	㈱阪和流通センター設立
平成7年4月	東北支店(仙台市)、九州支店(福岡市)開設
平成7年7月	阪和貿易(上海)有限公司(現・阪和(上海)管理有限公司(現・連結子会社))設立
平成8年2月	㈱ハローズ(現・連結子会社)設立
平成9年3月	㈱阪和アルファビジネス(現・持分法適用非連結子会社)設立
平成12年3月	HANWA CANADA CORP.(現・連結子会社)設立
平成12年6月	エコスチール㈱(現・阪和エコスチール㈱(現・連結子会社))設立
平成13年3月	㈱阪和流通センターの営業をエイチケイ流通センター東京㈱(現・阪和流通センター東京㈱(現・連結子会社))、エイチケイ流通センター大阪㈱(現・阪和流通センター大阪㈱(現・連結子会社))及びエイチケイ流通センター名古屋㈱(現・阪和流通センター名古屋㈱(現・連結子会社))に譲渡
平成13年4月	㈱阪和流通センターを合併
平成14年4月	阪和スチールサービス㈱(現・連結子会社)設立
平成14年10月	長富不銹鋼中心(蘇州)有限公司(現・連結子会社)へ追加出資し子会社化
平成14年11月	PT.HANWA INDONESIA(現・連結子会社)設立
平成16年6月	HANWA STEEL SERVICE (THAILAND) CO.,LTD.(現・連結子会社)設立
平成17年7月	阪和鋼板加工(東莞)有限公司(現・連結子会社)設立
平成18年4月	北海道支店(札幌市)開設
平成19年2月	新潟営業所(現・新潟支店(新潟市))、広島営業所(現・中国支店(広島市))開設 相互鉄筋工業㈱(現・㈱トーハンスチール(現・連結子会社))の株式を取得
平成20年9月	PT.HANWA STEEL SERVICE INDONESIA(現・連結子会社)設立
平成21年4月	ヨハネスブルグ支店開設
平成21年10月	北関東営業所(現・北関東支店(伊勢崎市))開設
平成22年4月	昭和メタル㈱(現・連結子会社)の株式を追加取得し子会社化 阪和エコスチール㈱が太洋鋼材㈱(現・連結子会社)の株式を取得
平成22年8月	ダイコースチール㈱(現・連結子会社)の株式を取得
平成22年10月	トヨーエナジー㈱(現・連結子会社)の株式を取得

平成23年 9月	阪和商貿(大連)有限公司(現・持分法適用非連結子会社)設立
平成23年10月	阪和商貿(青島)有限公司(現・持分法適用非連結子会社)設立
平成23年11月	阪和商貿(北京)有限公司(現・持分法適用非連結子会社)設立
平成23年12月	すばる鋼材(株)(現・連結子会社)の株式を取得
平成24年 2月	SEATTLE SHRIMP & SEAFOOD COMPANY, INC.(現・連結子会社)の株式を追加取得し子会社化
平成24年11月	ハンワフーズ(株)(現・連結子会社)設立
平成25年10月	三栄金属(株)(現・連結子会社)の株式を取得
平成26年10月	正起金属加工(株)(現・連結子会社)の株式を追加取得し子会社化
平成27年 7月	(株)ダイサン(現・連結子会社)の株式を取得
平成27年10月	日興金属(株)(現・連結子会社)の株式を追加取得
平成27年12月	西部サービス(株)(現・連結子会社)の株式を取得 (有)アルファフォルム(現・連結子会社)の株式を取得
平成29年 4月	亀井鐵鋼(株)(現・連結子会社)の株式を取得 山陽鋼材(株)(現・連結子会社)の株式を取得 日本南ア・クロム(株)(現・連結子会社)設立
平成29年10月	ジャパンライフ(株)(現・連結子会社)の株式を取得

3 【事業の内容】

当グループは、当社、子会社90社及び関連会社18社で構成され、鉄鋼を中心に金属原料、非鉄金属、食品、石油・化成品、木材及び機械等各種商品の販売を主たる事業とし、さらに鋼材加工、非鉄金属加工及びアミューズメント施設の管理・運営等の事業活動も行っております。

当グループは、販路開拓に積極的に取り組んでおり、国内外にわたり営業拠点を充実させております。

なお、当グループの事業に係わる位置付け及びセグメントとの関連は、次のとおりであります。

セグメントの名称	主な取扱商品またはサービスの内容		主要な関係会社名
鉄鋼事業	主な取扱商品は、条鋼、建設工事、鋼板、特殊鋼、線材、鋼管及び鉄屑であります。また、加工及び保管等を行っております。	国内	◎エスケーエンジニアリング㈱ ◎㈱ダイサン ◎阪和流通センター東京㈱ ◎阪和流通センター大阪㈱ ◎阪和流通センター名古屋㈱ ◎阪和スチールサービス㈱ ◎阪和エコスチール㈱ ◎三栄金属㈱ ◎㈱トーハンスチール ◎ダイコースチール㈱ ◎亀井鐵鋼㈱ ◎大洋鋼材㈱ ◎すばる鋼材㈱ ◎ジャパンライフ㈱ ◎山陽鋼材㈱ ○㈱カネキ ○㈱松岡鋼材 ○廣内庄延工業㈱ ◆近江産業㈱
		海外	◎HANWA STEEL SERVICE (THAILAND) CO., LTD. ◎PT. HANWA STEEL SERVICE INDONESIA ◎阪和鋼板加工(東莞)有限公司 ◎長富不銹鋼中心(蘇州)有限公司 ○HANWA STEEL SERVICE MEXICANA, S. A. DE C. V. ○日鴻不銹鋼(上海)有限公司 ◆COSMOSTEEL HOLDINGS LTD. ◆SMC TRADING INVESTMENT JSC ●東莞鉄和金属制品有限公司
金属原料事業	主な取扱商品は、ニッケル、クロム、シリコン、マンガン及び合金鉄であります。	国内	◎日興金属㈱(注) ◎昭和メタル㈱ ◎日本南ア・クロム㈱
		海外	◆SAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD.
非鉄金属事業	主な取扱商品は、アルミニウム、銅及び亜鉛であります。また、リサイクル事業を行っております。	国内	◎日興金属㈱(注) ◎正起金属加工㈱
食品事業	主な取扱商品は、水産物及び畜産物であります。	国内	◎ハンワフーズ㈱
		海外	◎SEATTLE SHRIMP & SEAFOOD COMPANY, INC.
石油・化成品事業	主な取扱商品は、石油製品、工業薬品、化学品及び廃棄物燃料であります。	国内	◎トーヨーエナジー㈱ ◎西部サービス㈱ ◎㈱アルファフォルム
海外販売子会社	海外の主要な拠点において当社と同様に多種多様な商品の売買を行っております。	海外	◎HANWA AMERICAN CORP. ◎HANWA SINGAPORE (PRIVATE) LTD. ◎阪和(香港)有限公司 ◎HANWA THAILAND CO., LTD. ◎阪和(上海)管理有限公司 ◎台湾阪和興業股份有限公司 ◎HANWA CANADA CORP. ◎PT. HANWA INDONESIA ○HANWA MEXICANA, S. A. DE C. V. ◇阪和商貿(北京)有限公司 ◇阪和商貿(大連)有限公司 ◇阪和商貿(青島)有限公司
その他	主な取扱商品は、木材及び機械であります。また、アミューズメント施設の管理・運営等を行っております。	国内	◎㈱ハローズ ◇㈱阪和アルファビジネス

◎連結子会社

○非連結子会社

◇持分法適用非連結子会社

◆持分法適用関連会社

●関連会社

(注) 日興金属㈱は金属原料事業、非鉄金属事業の2セグメントに亘る事業を行っております。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 又は出資金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) エスケーエンジニアリング㈱	東京都中央区	222	鉄鋼事業	100.0	鉄骨工事の現場施工管理 役員の兼任等…有
㈱ダイサン	大阪市西区	200	鉄鋼事業	100.0	鉄鋼製品の仕入及び販売 融資 役員の兼任等…有
阪和流通センター東京㈱	千葉県習志野市	100	鉄鋼事業	100.0	鉄鋼製品の加工及び保管、 金属原料・石油製品の保管等 土地及び設備の賃借 役員の兼任等…有
阪和流通センター大阪㈱	堺市堺区	100	鉄鋼事業	100.0	鉄鋼製品の加工及び保管の 請負等 役員の兼任等…有
阪和流通センター名古屋㈱	愛知県海部郡 飛島村	100	鉄鋼事業	100.0	鉄鋼・非鉄製品の加工及び 保管等 当社所有土地及び設備の賃借 役員の兼任等…有
阪和スチールサービス㈱	滋賀県甲賀市	100	鉄鋼事業	100.0	鉄鋼製品の加工及び販売 融資 役員の兼任等…有
阪和エコスチール㈱	千葉県鎌ヶ谷市	100	鉄鋼事業	100.0	鉄鋼製品の加工及び販売 当社所有土地の賃借 融資 役員の兼任等…有
三栄金属㈱	大阪市中央区	100	鉄鋼事業	100.0 (3.0)	鉄鋼製品の仕入及び販売 役員の兼任等…有
㈱トーハンスチール	千葉県船橋市	64	鉄鋼事業	100.0	鉄筋の加工及び販売 当社所有設備の賃借 役員の兼任等…有
ダイコースチール㈱	大阪市住之江区	50	鉄鋼事業	100.0	鉄鋼製品の加工及び販売 融資 役員の兼任等…有
亀井鐵鋼㈱	愛媛県松山市	50	鉄鋼事業	100.0 (1.0)	鉄鋼製品の加工及び販売 役員の兼任等…有
太洋鋼材㈱	大阪市中央区	10	鉄鋼事業	100.0 (100.0)	鉄鋼製品の加工及び販売 阪和エコスチール㈱の子会社 融資 役員の兼任等…有
すばる鋼材㈱	大阪市大正区	57	鉄鋼事業	97.0	鉄鋼製品の仕入及び販売 融資 役員の兼任等…有
ジャパンライフ㈱	東京都葛飾区	60	鉄鋼事業	80.1	鉄鋼製品の販売 融資 役員の兼任等…有
山陽鋼材㈱	広島市中区	20	鉄鋼事業	51.0	鉄鋼製品の加工及び販売 役員の兼任等…有
HANWA STEEL SERVICE (THAILAND) CO., LTD.	Chonburi, Thailand	THB 576,000千	鉄鋼事業	100.0	アジア地域における鉄鋼製品 の加工及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
PT. HANWA STEEL SERVICE INDONESIA	Bekasi, Indonesia	US\$ 18,000千	鉄鋼事業	100.0 (1.0)	アジア地域における鉄鋼製品 の加工及び販売 融資・債務保証 役員の兼任等…有
阪和鋼板加工(東莞)有限公司	東莞、中国	US\$ 15,000千	鉄鋼事業	100.0 (40.0)	アジア地域における鉄鋼製品 の加工及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
長富不銹鋼中心(蘇州)有限公司	太倉、中国	US\$ 18,000千	鉄鋼事業	74.0	アジア地域における鉄鋼製品 の加工及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
日興金属㈱	北九州市門司区	20	金属原料・非鉄 金属事業	98.0	特殊金属・非鉄金属の加工及び 販売 役員の兼任等…有
昭和メタル㈱	川崎市川崎区	20	金属原料事業	97.0	特殊金属の加工、仕入及び販売 債務保証 役員の兼任等…有

名称	住所	資本金 又は出資金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
日本南ア・クロム㈱	東京都中央区	13,608	金属原料事業	50.1	投資事業 役員の兼任等…有
正起金属加工㈱	愛知県知多郡 武豊町	20	非鉄金属事業	97.0	非鉄金属の加工、仕入及び販売 融資 役員の兼任等…有
ハンワフーズ㈱	東京都中央区	200	食品事業	100.0	水産加工品の仕入及び販売 融資 役員の兼任等…有
SEATTLE SHRIMP & SEAFOOD COMPANY, INC.	Washington, U. S. A.	US\$ 300千	食品事業	100.0 (49.0)	役員の兼任等…有
トーヨーエナジー㈱	大阪市中央区	120	石油・化成品事業	100.0	エネルギー関連製品の仕入及 び販売 債務保証 役員の兼任等…有
西部サービス㈱	大阪市淀川区	20	石油・化成品事業	100.0	廃棄物燃料の仕入 融資 役員の兼任等…有
(有)アルファフォルム	大阪市淀川区	3	石油・化成品事業	100.0	廃棄物燃料の仕入 融資 役員の兼任等…有
HANWA AMERICAN CORP.	New Jersey, U. S. A	US\$ 40,000千	海外販売子会社	100.0	北米地域における商品の仕入 及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
HANWA SINGAPORE (PRIVATE) LTD.	Singapore	US\$ 13,827千	海外販売子会社	100.0	アジア地域における商品の 仕入及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
阪和(香港)有限公司	香港、中国	HK\$ 70,000千	海外販売子会社	100.0	アジア地域における商品の 仕入及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
HANWA THAILAND CO., LTD.	Bangkok, Thailand	THB 200,000千	海外販売子会社	100.0	アジア地域における商品の 仕入及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
阪和(上海)管理有限公司	上海、中国	US\$ 2,500千	海外販売子会社	100.0	アジア地域における商品の 仕入及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
台湾阪和興業股份有限公司	台北、台湾	NT\$ 15,000千	海外販売子会社	100.0	アジア地域における商品の 仕入及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
HANWA CANADA CORP.	Vancouver, Canada	CAN\$ 2,300千	海外販売子会社	100.0 (100.0)	北米地域における商品の仕入 及び販売 HANWA AMERICAN CORP. の子会社 役員の兼任等…有
PT. HANWA INDONESIA	Jakarta, Indonesia	US\$ 2,100千	海外販売子会社	99.9 (0.4)	アジア地域における商品の 仕入及び販売 債務保証 役員の兼任等…有
㈱ハローズ	東京都中央区	100	その他 (アミューズメント 施設の管理・運営)	100.0	資産の販売・賃貸 融資・債務保証 役員の兼任等…有
(持分法適用関連会社)					
近江産業㈱	大阪市大正区	100	鉄鋼事業	37.6	鉄鋼製品の仕入及び販売 役員の兼任等…有
COSMOSTEEL HOLDINGS LTD.	Singapore	S\$ 56,324千	鉄鋼事業	28.4	役員の兼任等…有
SMC TRADING INVESTMENT JSC	Ho Chi Minh, Vietnam	VND 420,059百万	鉄鋼事業	20.0	役員の兼任等…有
SAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD.	Johannesburg, South Africa	ZAR 2,555百万	金属原料事業	29.0 (20.0)	役員の兼任等…有

(注) 1 「主要な事業の内容」には、「セグメント情報」に記載された名称を記載しております。

2 「議決権の所有割合」の(内書)は間接所有割合であります。

3 日本南ア・クロム㈱は特定子会社に該当しております。

4 有価証券届出書及び有価証券報告書提出会社はありません。

5 連結売上高に占める売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く。)の割合が10%を超えている連結子会社がないため、主要な損益情報等の記載をしておりません。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

(平成30年3月31日現在)

セグメントの名称	従業員数(名)
鉄 鋼 事 業	2,164 [315]
金 属 原 料 事 業	108 [10]
非 鉄 金 属 事 業	108 [19]
食 品 事 業	110 [15]
石 油 ・ 化 成 品 事 業	197 [16]
海 外 販 売 子 会 社	378 [11]
そ の 他	208 [215]
全 社 (共 通)	303 [34]
計	3,576 [635]

- (注) 1 従業員数は、当社グループ(当社及び連結子会社)から当社グループ外への出向者を除いた就業人員数であります。
- 2 「従業員数」の〔外書〕は、臨時従業員の年間平均雇用人員数であります。
- 3 臨時従業員には、嘱託社員及びアルバイト等を含み、派遣社員を除いております。
- 4 全社(共通)として記載している従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属している人員数であります。

(2) 提出会社の状況

(平成30年3月31日現在)

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
1,306 [192]	37.6	13.1	8,096

セグメントの名称	従業員数(名)
鉄 鋼 事 業	712 [110]
金 属 原 料 事 業	46 [2]
非 鉄 金 属 事 業	44 [6]
食 品 事 業	62 [14]
石 油 ・ 化 成 品 事 業	71 [9]
そ の 他	68 [17]
全 社 (共 通)	303 [34]
計	1,306 [192]

- (注) 1 従業員数は、当社から関係会社等への出向者を除いた就業人員数であります。なお、取締役を兼任していない執行役員7名を含んでおりません。
- 2 「従業員数」の〔外書〕は、臨時従業員の年間平均雇用人員数であります。
- 3 臨時従業員には、嘱託社員及びアルバイト等を含み、派遣社員を除いております。
- 4 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
- 5 海外駐在員7名は従業員数、平均年齢及び平均勤続年数の計算基礎には含み、平均年間給与の計算基礎には含んでおりません。
- 6 全社(共通)として記載している従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属している人員数であります。

(3) 労働組合の状況

当社グループ(当社及び連結子会社)において、特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社は経営理念として、『私たちは、時代と市場の変化に迅速に対応し、「流通のプロ」として顧客の多様なニーズに応え、広く社会に貢献します。』を掲げております。

この理念の下、顧客第一主義を掲げ、付加価値を高めた商品の流通や顧客ニーズに即応した提案型サービスを提供するユーザー系商社として、「存在感ある商社流通」を追求し、すべてのステークホルダーからの評価・支持を得られる企業価値の向上に努めます。またコンプライアンスを重視し、事業を通じて国際社会や地域社会に貢献することで、「企業の社会的責任」を果たしていきます。

(2) 目標とする経営指標

企業価値の向上と財務体質の強化を図るため、投下資本利益率（ROIC）、ネット負債倍率（Net DER）などを経営指標としております。また、企業活動の裾野を広げて事業の成長性を量る指標として、新規ユーザー獲得数も採用しております。

なお、平成31年3月期の通期目標は、売上高2兆円、営業利益310億円、経常利益300億円、親会社株主に帰属する当期純利益195億円としております。

(3) 中長期的な会社の経営戦略

当社グループは、平成28年度から平成31年度までの4か年にわたる中期経営計画を策定し、重点課題の達成に向けた取り組みを進めております。中期経営計画の概要は、以下の通りです。

《テーマ》

『Sへのこだわり -STEADY, SPEEDY, STRATEGIC- 』

～中長期を見据えたSUSTAINABLEな収益体質と経営基盤の強化～

- ① STEADY：既存の事業領域から得られる収益の確保と強化
- ② SPEEDY：グループ企業や国内外の戦略投資からの投資効果の早期実現
- ③ STRATEGIC：4年間で500億円程度の戦略的投資の継続による将来の追加収益の確保

《業績目標》

最終年度（平成31年度） 売上高2兆円、経常利益350億円

新規ユーザー獲得数2,700社（4年間累計）

※当社は平成30年5月11日開催の取締役会において、最終年度の売上高目標を、これまでの進捗や事業環境などを考慮して、2兆1,000億円に見直しすることを決議いたしました。

当連結会計年度での上記の基本課題、成長戦略に係る主な進捗状況は、次のとおりです。

鉄鋼事業では、そこか（即納・小口・加工）機能を充実させ、地域需要の深堀を推進するべく平成29年4月に鉄鋼卸売業の亀井鐵鋼(株)（愛媛県松山市）、山陽鋼材(株)（広島県広島市）を新たに当社グループに加えた他、6月には群馬県伊勢崎市に物流・加工拠点として北関東スチールセンターを開設し、10月には特殊金具製造の最大手であるジャパンライフ(株)もグループ会社化するなど機能強化を進めました。また、海外でもマレーシアのステンレスメーカーBAHRU STAINLESS SDN. BHD. やベトナムの鋼材卸売業SMC TRADING INVESTMENT JSCに出資した他、東南アジア地域での鉄筋加工や製缶加工などを強化し、「第二の阪和を東南アジアに」戦略も進展させました。

金属原料事業では、南アフリカのクロム製造業SAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD. 株式を独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）と共同で取得し、対日向け製品の仕入れソースを強化した他、メキシコで炭酸リチウムの製造プロジェクトを進めているBACANORA MINERALS LTD.（現 BACANORA LITHIUM PLC）にも出資、南アフリカでJOGMEC主導で進められているウォーターバグ白金族プロジェクトへの参画も決定するなど世界各地からの金属資源調達ネットワークの確立を進めています。また、当社が出資しているインドネシアでの青山控股集団有限公司が進めるステンレスプロジェクトもスラブやステンレス母材の出荷を開始し、当社もその販売の一翼を担っています。

非鉄金属事業では、オランダの三菱マテリアル(株)子会社で一部出資もしている貴金属スクラップ集荷・検品業MM METAL RECYCLING B.V.の稼働開始に向けて、欧州での集荷・販売体制の構築に努めたほか、銅スクラップやアルミニウムスクラップの輸入事業も拡大しました。

食品事業では、川下展開を進める食品版そこか戦略を推進し、子会社のハンワフーズ(株)と連携して寿司ネタ用商品やかき揚げ、エビ・イカ・タコなどの加工品の商品開発・提案を行いました。

石油・化成品事業では、石油製品需要の縮小を見据えて、出資先のイーレックス(株)と子会社のトーヨーエナジー(株)で設立した売電事業合弁会社が、トーヨーエナジー(株)の販売ネットワークを活用して低圧・家庭用電力の販売を進めています。また、バイオマス発電所向けに需要が拡大しているPKS(椰子殻)や木質チップ・ペレット類などの安定調達のため、仕入ソースの開拓・出資を含めた提携を引き続き進めています。

企業体制面につきましては、引き続きコンプライアンスの徹底と、コーポレート・ガバナンスや内部統制の強化に努めており、「内部統制システム整備に関する基本方針」に則って企業を運営していくと共に、金融商品取引法に基づく財務報告に係る内部統制報告制度への対応として、内部統制・HKQC推進課が当社の内部統制システムの有効性検証、システム改善を継続して実施しております。また、業務品質の向上を目指すHKQC(Hanwa Knowledge Quality Control)活動を推進しており、業務フローにおけるリスクポイントを洗い出し、ケアすることで、手続きミスや漏れによる収益の取りこぼしを減らす取り組みを進めています。

当社グループとしましては、今後、これらの事業戦略を継続して実行していくことで、総合的な企業価値の向上と持続的な企業成長を実現させ、さらなる顧客満足の向上を図り、合わせて社会貢献にも目配りしてまいります。

(4) 経営環境及び対処すべき課題

世界経済は、米国ではトランプ政権での経済・財政政策や通商問題の動向の他、FRBによるフェデラル・ファンド金利の追加利上げや資産規模の縮小方針の影響に注意が必要ですが、緩やかな回復基調を継続するものと思われる。欧州でも英国のEU離脱問題や欧州中央銀行の資産購入プログラム縮小の影響に加え、移民問題など各国の政情面での不安定要素はあるものの、実体経済面では堅調に推移するものと思われる。また、中国経済も、堅調な個人消費に加え、企業活動や固定資産投資も拡大基調にあり、政府当局も財政支出を継続する方針にあることから景気は底堅く推移するものと思われる。その他の新興諸国も緩やかな成長が続くと予想されますが、国際金融環境や先進国経済の変化による影響には留意が必要です。

国内経済は、雇用・所得環境の改善や働き方改革などの政策効果により、個人消費や住宅投資が引き続き底堅く推移すると思われる他、東京オリンピック・パラリンピック関連やインフラ整備・都市再開発などの建設需要も高い水準を維持していくものと思われる。製造業でも内需の増加や海外景気の持ち直しによる輸出増などにより、生産活動は堅調に推移し、設備投資も回復していくものと思われる。

当社グループとしましては、このような事業環境の中で、各事業分野における需要動向を的確に把握し、取引先のニーズを反映した適切な販売・在庫政策を進めるとともに、新規取引先を積極的に開拓することにより、業績の維持・向上に注力していく所存です。

当社グループの対処すべき課題としては、以下を認識しております。

営業面では、メーカー・サプライヤーからユーザーにいたるバリューチェーンの各段階の効率化や最適化を実現していくことにより、全体に含まれるあらゆる収益機会を確実にとらえて収益を最大化していく必要があり、そのために自律的な成長と事業の多様性の確保を軸に、攻めの戦略を打ち出していきます。また、「第二の阪和を東南アジアに」をコンセプトに、これからの有望・成長市場である東南アジア域内へモノの輸出から機能の輸出への転換を推進するほか、北米での事業展開を強化し、海外での収益力強化を図ります。

経営管理面では、事業規模の拡大やグループ会社の増加に伴い、部分最適からグローバル最適へと、本社の経営資源を効率よく効果的に配分することができるコーポレート体制の構築が必要であり、それぞれのグループ会社や地域の特性に適合した自律性の尊重と収益を漏らさない統合管理のバランスを追求しながら、徹底した効率化も推進していきます。

(5) 株式会社の支配に関する基本方針

※当社は平成30年5月11日開催の取締役会において、現対応方針の有効期間が満了する当社第71回定時株主総会終結の時をもって、現対応方針を継続せず、廃止することを決議いたしましたので、以下の対応方針は失効しております。

① 基本方針の内容

当社は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者は、当社の企業価値及び株主共同の利益の確保・向上を図るという観点から決定されるべきものと考えております。従いまして、結果的に支配権の異動を伴うような株式の大規模な買付提案（以下、「大規模買付提案」といいます。）に応じるか否かは、当社株式を保有する株主の皆様への判断に委ねられるべきものであると考えます。この考えに基づき、当社株式の大規模買付提案が提起された場合には、株主の皆様が提案に応じるか否かを判断するに足る十分な情報と時間が提供されることが不可欠であると考えます。

しかし、株式の大規模買付行為の中には、大規模買付の対象企業（以下、「対象企業」といいます。）の経営者や株主の皆様に対する買付目的や買付後の経営戦略等について明確な説明がないまま行われるものや、大規模買付者の一方的な考えに基づき買付行為が行われるものなど、対象企業の経営陣との十分な協議や合意のプロセスを経ることなく進められることがあります。

当社は当社の企業価値及び株主共同の利益の確保・向上の観点から、株主の皆様が大規模買付提案に応諾するか否かを検討するための十分な情報と時間が提供されない場合や、当社の支配権が異動するに足る当社株式を取得した特定の株主により、当社の企業価値及び株主の皆様への共同の利益が損なわれるおそれがあると判断される場合には、こうした株主を当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者として不適切であると判断し、必要かつ相当な範囲において、対抗措置をとることができる旨を当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針（以下、「基本方針」といいます。）といたします。

② 基本方針の実現に資する特別な取組み

当社は、平成28年度を初年度とする4か年の中期経営計画を推進しております。本中期経営計画では、『Sへのこだわり -STEADY, SPEEDY, STRATEGIC-』～中長期を見据えたSUSTAINABLEな収益体質と経営基盤の強化～をテーマに掲げ、達成すべき具体的な事業戦略を設けております。当社は、具体的な事業戦略を着実に実行していくことで、当社の企業価値及び株主共同の利益の最大化を図れるものと考えております。

③ 不適切な支配の防止のための取組み

当社は、平成27年6月26日開催の当社第68回定時株主総会において、当社の企業価値・株主共同の利益を向上させるため、基本方針に照らして不適切な支配の防止のための取組みとして、「当社株式に対する大規模買付行為への対応方針（買収防衛策）の一部改定及び継続の件」を上程し、株主の皆様のご承認をいただきました（以下、承認後の対応方針を「現対応方針」といいます。）。

現対応方針におきまして、当社は大規模買付者からの事前の情報提供に関する一定のルールを定めるとともに、ルールを遵守しない場合や当社の企業価値や株主共同の利益を毀損することが明らかであると当社取締役会が判断する場合には、一定の対抗措置を講じることがある旨を公表しております。また、大規模買付行為を評価・検討する際や、対抗措置を発動する際等には、当社取締役会は独立した第三者により構成される特別委員会に諮問し、特別委員会の助言・勧告を最大限尊重することとしております。特別委員会は社外有識者、社外取締役、社外監査役の中から選任された3名以上の委員から構成され、これにより当社取締役会の行う判断の公正性、透明性が確保できるものと考えます。

④ 上記取組みについての取締役会の判断

当社取締役会は、上記③の取組みが上記①の当社の基本方針に沿って策定され、当社の企業価値、株主共同の利益を確保するための取組みであり、株主の皆様への共同の利益を損なうものではないと考えます。また、取締役会による恣意的な判断がなされることを防止するため、独立した第三者により構成される特別委員会を設置し、取締役会が対抗措置を発動する際等には特別委員会の助言・勧告を最大限尊重することにより、現対応方針に係る取締役会の恣意的な判断を排除する仕組みを確保しております。

また、当社は、現対応方針の有効期限を当社第68回定時株主総会終結のときから3年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結のときまでとしております。

2 【事業等のリスク】

当社グループの経営成績、株価及び財政状態等に影響を及ぼす可能性のあるリスクには、以下のようなものがあります。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経済状況の変動に係るリスク

当社グループの全世界における営業収入は、当社グループが商品を販売している国または地域の経済状況の影響を受けます。従いまして、日本、北米、欧州、アジア等を含む当社グループの主要市場における景気後退及びそれに伴う需要の縮小は、当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) 商品市況の変動に係るリスク

当社グループでは、鉄鋼製品、金属原料、非鉄金属、食品及び石油・化成品等について流通在庫を有しております。これらは市況商品であるため、需給状況や為替動向が市況に与える影響が大きく、市況の変動への適切な対応ができなかった場合、当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) 為替レートの変動に係るリスク

当社グループの事業には、全世界における商品の仕入と販売が含まれております。各地域における収益、費用、資産、負債を含む現地通貨建ての項目は、連結財務諸表の作成のために円換算しております。換算時の為替レートにより、これらの項目は元の現地通貨における価値が変わらなかったとしても、円換算後の価値が影響を受ける可能性があります。一般に他の通貨に対する円高（特に当社グループの売上の重要部分を占める米ドルに対する円高）は当社グループの輸出取引に対しては悪影響を及ぼしますが、輸入取引には好影響を及ぼし、円安は輸入取引に対しては悪影響を及ぼしますが、輸出取引には好影響を及ぼします。

(4) 金利の変動に係るリスク

当社グループは、営業取引及び投融資活動において、金融機関からの借入及び社債等資本市場からの資金調達を行っております。このうち変動金利による調達につきましては、一部に金利スワップ等を利用して金利変動リスクの軽減に努めておりますが、今後の金利動向によっては、当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(5) 株価の変動に係るリスク

当社グループは、取引先を中心に国内外で市場性のある株式を保有しており、株価変動のリスクを負っております。従いまして、保有する上場株式の株価動向によっては、当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(6) 取引先の信用に係るリスク

当社グループの事業における売上債権の大部分は、販売先ごとに一定の信用を供与し、掛売りを行ったものであります。当社グループにおいては厳格かつ機敏な与信管理を行っておりますが、必ずしも全額の回収が行われる保証はありません。従いまして、販売先の不測の倒産・民事再生手続等は、当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(7) 事業投資に係るリスク

当社グループは、既存事業の強化や事業領域の拡大等を図るための事業投資を行っております。これらの投資に際しては、投資等審査委員会において検討を行うなど投資内容や投資金額に応じた所定の手続きを経て実行の是非を決定しておりますが、投資先の企業価値の低下や所期の投資採算が確保できない場合は、当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(8) 資金の流動性に係るリスク

当社グループは、営業取引及び投融資活動において、金融機関からの借入及び社債等資本市場からの資金調達を行っております。資金調達に当たっては、資金需要見通しに基づき、手元流動性の確保に努めておりますが、国内外の金融市場の混乱や金融規制の変更、当社グループへの信用格付の引き下げまたは金融機関の融資方針の

変更など調達環境に大きな変化が生じた場合には、資金調達の制約や調達コストの増加などにより、当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(9) 国際的活動及び海外進出に潜在するリスク

当社グループは、近年アジア市場や米国、欧州等の市場に対して積極的に事業進出を行っております。これらの海外市場への事業進出には以下に掲げるようないくつかのリスクが内在しております。

- ① 予期しない法律または関税などの貿易取引規制の変更
- ② 不利な政治的・経済的変動や国際通貨の変動
- ③ 人材の採用と確保の難しさ
- ④ 未整備のインフラが当社グループの活動に悪影響を及ぼす、または当社グループの製品やサービスに対する顧客の支持を低下させる可能性
- ⑤ 企業活動にとって不利な税制度への変更
- ⑥ テロ、戦争、その他の要因による社会的混乱

従いまして、これらの事象は当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(10) 法的規制等に係るリスク

当社グループは、事業を展開する各国において、事業・投資の許認可、国家安全保障またはその他の理由による輸出入及び販売制限、関税をはじめとするその他の貿易取引規制等、様々な政府規制の適用を受けております。また、通商、独占禁止、特許、租税、為替管理、食品の安全規制、環境・リサイクル関連等の法規制の適用も受けております。これらの規制により、当社グループの活動が制限される可能性があるだけでなく、規制への対応がコストの増加につながる可能性もあります。従いまして、これらの規制は当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(11) 取扱商品の品質に係るリスク

当社グループが提供する製品やサービスについては、仕入先や委託加工先と共同で、適切な品質管理や検査体制の下に提供しておりますが、製品やサービスに欠陥があり、製造物責任賠償やリコール等が発生した場合には、多額の費用負担が発生することや、当社グループの社会的信用や企業イメージの低下を招くなど、当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(12) 自然災害等に係るリスク

当社グループは、地震等の自然災害やインフルエンザ等の感染症の発生に備えて、危機管理マニュアルや事業継続計画の整備、安否確認システムの導入、耐震対策や防災訓練などの対策を実施しております。しかしながら当社グループの各事業所及び社員の活動は広範囲に及んでおり、自然災害等が発生した際にはその被害を完全に回避できるものではありません。想定を超える被害が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(13) 退職給付債務に係るリスク

当社グループの従業員退職給付費用及び債務は、割引率や長期期待運用収益率等数理計算上で設定される前提条件に基づいて算出されております。実際の結果が前提条件と異なる場合、または前提条件が変更された場合、その影響は累積され、将来にわたって定期的に認識されるため、一般的には将来期間において認識される費用及び計上される債務に影響を及ぼします。従いまして、割引率の低下や運用利回りの悪化は当社グループの経営成績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社、連結子会社及び持分法適用会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

① 経営成績の状況

当連結会計年度における世界経済は、米国では個人消費や民間投資などが底堅く推移し、企業活動も生産・輸出が回復するなど拡大基調を維持しました。また、欧州では各国で国政選挙が続き、政情面での不安定要素はありましたが、実体経済面では緩やかな拡大基調が続きました。中国では当局の景気下支え策の効果により、インフラや不動産の開発投資が持ち直した他、企業活動の活発化による雇用・所得環境の改善が個人消費を牽引するなど成長を維持しました。その他の新興諸国でも欧米諸国や中国の堅調な景気による輸出の持ち直しや資源価格の回復に伴い、個人消費や設備投資など内需も堅調に推移しました。

一方、国内経済は、北朝鮮問題や米中通商摩擦などの動向により、為替や金利、株式市場が影響を受ける局面があったものの、海外景気の緩やかな回復を受けて輸出が回復基調にあった他、所得や雇用状況の改善に伴い、住宅投資や個人消費も底堅く推移して、企業の生産活動も緩やかに回復、建設需要や設備投資も持ち直すなど、全体としては安定した推移となりました。

このような環境において、当連結会計年度の売上高は、前連結会計年度後半から上昇傾向に転じた鋼材や金属資源の価格が前連結会計年度に比べ高い水準にあったことなどから、前連結会計年度比18.3%増の1,791,118百万円となりました。また、利益面では、営業利益は、金属原料事業の増益などにより、前連結会計年度比11.9%増の26,217百万円に、経常利益は、営業利益の増加に加え前連結会計年度には差損であった為替差損益が当連結会計年度においては差益に転じたことなども寄与し、前連結会計年度比11.3%増の25,502百万円に、親会社株主に帰属する当期純利益は、特別利益の減少や法人税等の増加はあったものの、前連結会計年度比6.1%増の17,354百万円になりました。

セグメントごとの経営成績は次のとおりであります。

鉄鋼事業

鋼材需要が製造業分野、建設土木分野ともに堅調に推移する中、供給面での制約もあり、需給が引き締まりました。また、鋼材価格は原料価格の上昇や需給のタイト化を反映して、上げ基調が強まり、前連結会計年度に比べ高い水準となりました。利益面では、鋼材価格の上昇ペースは徐々に鈍化してきたものの、年度前半の鋼材価格の上昇局面では、製造業向けの紐付き・流通業向け店売分野で利幅が拡大し、全体の利益を押し上げました。これらの結果、当事業の売上高は前連結会計年度比18.4%増の931,948百万円、セグメント利益は前連結会計年度比12.4%増の20,324百万円となりました。

金属原料事業

合金鉄価格の上昇などにより販売価格が前連結会計年度に比べ高い水準にあったことに加え、クロム系やマンガン系の合金鉄、ステンレス母材の拡販が収益を押し上げました。また、当連結会計年度から持分法適用会社となったSAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LIMITEDからの持分法投資損益は損失になったものの、前連結会計年度には赤字となっていた昭和メタル㈱の損益が回復したことも利益増に寄与しました。これらの結果、当事業の売上高は前連結会計年度比50.9%増の203,200百万円、セグメント利益は前連結会計年度比250.7%増（約3.5倍）の4,958百万円となりました。

非鉄金属事業

中国の環境規制や堅調な需要などに支えられてアルミニウムや銅などの国際商品価格が強含みで推移したことに加え、銅スクラップなどの販売増が収益の増加に寄与しました。また、前連結会計年度の為替差損が当連結会計年度では差益に転換したことも利益を押し上げました。これらの結果、当事業の売上高は前連結会計年度比25.1%増の99,060百万円、セグメント利益は前連結会計年度比87.9%増の2,038百万円となりました。

食品事業

海外産地の水揚げ量の減少や漁獲枠の縮小、低い在庫水準に起因して、エビ・カニ類やサケ類を中心とした商品価格が前連結会計年度に比べ高い水準にあり、取扱量も堅調に推移したことが売上高を押し上げました。一方、利益面では、一部商品の国内市況が高値が続いたことによる需要停滞により年央から軟調に転じた一方で、海外産地価格の高止まりによる仕入コストの上昇のため、前連結会計年度に比べ利幅が縮小しました。これらの結果、当事業の売上高は前連結会計年度比11.8%増の99,477百万円、セグメント利益は前連結会計年度比63.2%減の1,057百万円となりました。

石油・化成品事業

原油価格は産油国の協調減産などにより緩やかな上昇基調を維持し、石油製品価格も元売会社の価格政策により前連結会計年度よりも高い水準にありましたが、ガソリンや灯油などのスポット取引の大幅な減少が収益を下押し

しました。加えて利益面では、前連結会計年度に好採算だった輸入日用雑貨品販売の利益が平準化して減少したことも減益要因となりました。これらの結果、当事業の売上高は前連結会計年度比9.0%減の240,695百万円、セグメント利益は前連結会計年度比12.0%減の2,164百万円となりました。

海外販売子会社

船用石油の商権を移管したシンガポールでの取扱い増に加え、タイやシンガポールでの非鉄金属スクラップ販売やインドネシア、北米などでの鋼材販売の増加が収益を押し上げました。これらの結果、売上高は前連結会計年度比27.2%増の221,678百万円、セグメント利益は前連結会計年度比383.4%増（約4.8倍）の950百万円となりました。

その他の事業

木材事業では住宅メーカー向けなどで販売を伸ばしたものの、ユーロ安による仕入コストの上昇により利幅が縮小した他、前連結会計年度に収益に大きく寄与した機械事業でのレジャー機械の物件完工が、当連結会計年度においては発生しなかったことも収益を押し下げました。これらの結果、売上高は前連結会計年度比4.9%増の76,598百万円、セグメント利益は前連結会計年度比54.7%減の691百万円となりました。

② 財政状態の状況

当連結会計年度末の総資産は、売上債権や投資有価証券の増加などにより、前連結会計年度末比24.2%増の861,965百万円となりました。

負債は、主に仕入債務や長短借入金の増加などにより、前連結会計年度末比26.0%増の658,264百万円となりました。そのうち、有利子負債は、前連結会計年度末比25.4%増の325,562百万円となり、当連結会計年度末のネット負債倍率は、1.5倍となりました。

純資産は、当連結会計年度から連結子会社となった日本南ア・クロム(株)の非支配株主持分が増加したことや親会社株主に帰属する当期純利益の積み上がりなどにより、前連結会計年度末比18.7%増の203,700百万円となりました。しかしながら、当連結会計年度末の自己資本比率は、自己資本の増加に比べ、負債や非支配株主持分の増加幅が大きかったことから、前連結会計年度末の24.5%から21.8%に低下しました。

③ キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末に比べ7,649百万円（28.1%）増加し、34,855百万円となりました。

これは主に売上高の上昇に伴う運転資金需要の増加や引き続き旺盛な投融资向け資金需要を反映して、長期借入金による調達などを増やしたことによるものであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における営業活動による支出は19,755百万円となりました（前連結会計年度は3,959百万円の収入）。これは主に売上高の上昇により、売上債権やたな卸資産の増加幅が拡大するなど運転資金需要が増加したことによるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における投資活動による支出は39,971百万円となり、前連結会計年度に比べ21,543百万円(116.9%)の増加となりました。これは主に投資有価証券の取得に係る支出や長期貸付金の実行額が増加したことによるものであります。

この結果、営業活動によるキャッシュ・フローと投資活動によるキャッシュ・フローを合計したフリー・キャッシュ・フローは、59,727百万円の支出となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における財務活動による収入は66,435百万円となり、前連結会計年度に比べ50,987百万円（330.1%）の増加となりました。これは主に投資資金や運転資金需要の増加に対応して、長期借入金による調達が増加したことによるものであります。

④ 受注及び販売の実績

a. 受注実績

受注実績と販売実績との差異は僅少なため、受注実績の記載は省略しております。

b. 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	外部顧客への売上高(百万円)	前連結会計年度比増減率(%)
鉄 鋼 事 業	920,269	18.6
金 属 原 料 事 業	198,330	50.9
非 鉄 金 属 事 業	97,356	25.3
食 品 事 業	98,876	11.5
石 油 ・ 化 成 品 事 業	233,926	△9.0
海 外 販 売 子 会 社	167,388	49.5
そ の 他	74,970	5.0
計	1,791,118	18.3

(注) 1 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

2 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合については、前連結会計年度及び当連結会計年度における当該割合が100分の10以上の相手先がないため、記載を省略しております。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

① 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたっての重要な会計方針につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項4 会計方針に関する事項」をご参照ください。なお、有価証券や固定資産の評価、貸倒引当金や賞与引当金等における見積り及び判断・評価については、過去の実績や足元の状況に応じて合理的と考えられる要因等に基づいて行っておりますが、見積り特有の不確実性があるため、実際の結果は異なる場合があります。

② 当連結会計年度の経営成績等の状況

売上高は、前連結会計年度後半から鋼材や金属資源などの価格が上げ基調に転じていたところに、鉄鋼事業や金属原料事業中心に販売量の増加も相まって、スポット取引の市場規模が縮小している石油・化成品事業以外の事業は増収となり、前連結会計年度に比べ18.3%増の1,791,118百万円となりました。そのうち、国内売上高は前連結会計年度に比べ14.6%増の1,302,944百万円、海外売上高は前連結会計年度に比べ29.3%増の488,174百万円となりました。

売上原価は、商品価格上昇による仕入単価の上昇や販売増に伴う仕入量の増加などにより、前連結会計年度に比べ18.6%増の1,718,922百万円となりました。

販売費及び一般管理費は、給料・福利厚生費などの人件費や旅費交通費の増加に加え、新規連結した子会社分の経費の増加などにより、前連結会計年度に比べ11.9%増の45,977百万円となりました。

営業外収益は、貸付に対する受取金利が増加したほか、前連結会計年度での為替差損が為替差益に転じたことなどから、前連結会計年度に比べ16.4%増加し4,531百万円となりました。また、営業外費用は、有利子負債の増加に伴う支払利息や銀行手数料の増加、持分法投資損失などにより、前連結会計年度に比べ18.9%増加し5,246百万円となりました。

特別利益は、関係会社の事業整理に伴う損失を過年度に引き当てていたところ、実際の損失が想定より縮小してきたことから引当金の戻り益が発生しましたが、前連結会計年度に比べ、固定資産や投資有価証券の売却益が減少したことから、前連結会計年度に比べ56.3%減少の678百万円となりました。一方、特別損失は、子会社の取扱製品の品質保証費用を345百万円引き当てました他、譲渡が決まったコイルセンターの阪和鋼板加工（江西）有限公司の出資金について評価損を計上しましたが、投資有価証券評価損が減少したことから、前連結会計年度に比べ42.5%減少の744百万円となりました。

法人税等は、前連結会計年度には売却した不動産について過年度に認識していた減損損失等を損金算入したことによる軽減効果が若干ありましたが、当連結会計年度では実効税率に近い水準となったため、前連結会計年度に比べ23.6%増加し、8,315百万円となりました。

当期純利益は、前連結会計年度に比べ4.2%増加の17,120百万円となり、その内、親会社株主に帰属する当期純利益は前連結会計年度に比べ6.1%増加の17,354百万円となりました。その結果、1株当たり当期純利益金額は、前連結会計年度の400.89円に対し、427.04円となりました。

③ 当社グループの経営成績等に重要な影響を与える要因

当社グループの経営成績等に影響を与える要因は、「2 事業等のリスク」に記載の通りです。

当社の主たる事業である商社事業において、影響が大きいものは、商品価格の動向であります。価格のトレンドや国内外の需給動向を確認しながら、売りと仕入のタイミングを図っていきます。特に在庫取引を行う商品については、買う時期と数量を慎重に判断して行います。鉄鋼事業では流通業向け店売り市場が縮小しており、以前ほど大量の在庫を保有することはなくなったため、市況下落による評価損も昨今は限定的ではあるものの、商品価格の変動幅が過去に比べて大きくなり、変動速度も速くなっており、実需以外の要因も影響を及ぼすため、市況動向の見極めが一層重要になっております。

次に、海外との取引において、決済通貨と表示通貨が異なる場合には、表示通貨への換算の際に為替変動の影響を受けます。個別の取引においては、原則として為替予約などにより為替変動による影響を最小限にするように対処しておりますが、決算期末での債権債務の期末レートへの換算替えにおいては、評価損益が発生することがあり、変動幅や速度によっては、全体の損益に影響を受けることがあります。

また、当社グループは、運転資金や投融資資金を金融機関からの借入や社債発行などにより調達しており、金利変動や金融市場の動向、格付などにより、事業の採算や借入コストに影響を受けます。取引仲介における口銭や手数料収入の利率を金利変動に応じて変動させたり、金利スワップ等でコスト増を抑制するなどの対応はしておりますが、金融市場の大きな変動の中では全体の損益に影響を受けることがあります。

次に、当社グループの取引は掛け売りやユーザンスを与えるものも多く、それらは各取引先に対する厳格な審査・与信管理の下に信用枠を設定しています。取引先の信用状態については、常に各営業担当が確認しており、会社としても社員の与信管理能力の強化や信用保険・ファクタリング等による債権保全に努めておりますが、不測の倒産等が発生した場合には、売上債権の全額を回収できず、貸倒れとなることもあり、全体の損益に影響を受けることがあります。

また、当社グループは様々な商品やサービスを取り扱っており、その品質については、仕入先や委託加工先と提携して万全を期していますが、時に品質基準を満たさないもの、不良なものが発生することがありえます。従来、商社は品質に問題があった場合には仕入先や加工先にその保証責任を負わせておりましたが、品質欠陥に対する社会的な影響が大きくなっている昨今、商社も品質管理に一層の注意を払うことが必要になっており、その対応によっては保証費用や信用低下などにより全体の損益に影響を受けることがあります。なお、当社では平成30年4月より、品質安全環境管理部を新設し、協力業者も含めた品質管理体制の強化を進めています。

当社グループとしては、上記以外の業績に影響を与えるリスク要因に対しても、あらかじめ可能な限り対処策を講じることで、影響の軽減に努めてまいります。

④ 当社グループの資本の財源及び資金の流動性

(キャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは、前連結会計年度が3,959百万円の収入であったことに対し、当連結会計年度においては19,755百万円の支出となりました。これは、前連結会計年度の半ばから売上高が増加して運転資金需要が増加傾向に転じたものが、当連結会計年度では売上高が一段と増加し、売掛金やたな卸資産が増加し

て運転資金需要がさらに増加したことなどによるものであります。

投資活動によるキャッシュ・フローは、前連結会計年度に比べて21,543百万円多い39,971百万円の支出となりました。これは、SAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD. 株式をはじめとした投資有価証券の取得による支出の増加や、出資先への長期貸付金の実行による支出が発生したことなどによるものであります。

財務活動によるキャッシュ・フローは、前連結会計年度に比べて50,987百万円多い66,435百万円の収入となりました。これは、投資有価証券などの取得のための投資資金や売上高の増加に伴う運転資金需要の増加に対応して、長期借入金による調達などを増やしたことによるものであります。

(財務政策)

当社グループは、運転資金及び投融資資金につきましては、銀行借入による調達を主としておりますが、安定的かつ機動的な流動性確保のため、資金調達ソースの多様化を図り、資本市場における社債並びにコマーシャル・ペーパー発行による調達も随時行っております。また、金融機関との間で総額80,000百万円のコミットメントライン契約を締結しております。

銀行借入につきましては、運転資金の調達には、主に長期借入金を利用することで安定的な資金を確保するとともに、日常の資金需要の変動については短期借入金により対応しております。当連結会計年度末現在の短期借入金残高は81,722百万円であり、主な通貨は日本円であります。長期借入金残高は1年以内の返済予定額34,522百万円を含めて182,124百万円であります。

社債につきましては、主に運転資金の調達を目的に利用しており、当連結会計年度末現在の社債発行残高は、普通社債50,176百万円であります。当社は市場環境や財政状態の変化に対応した機動的な社債発行を可能にするため、発行登録制度を利用しており、当連結会計年度末現在の国内公募普通社債発行登録枠の未使用枠は、40,000百万円であります。

当社グループは総合的な企業価値の向上と持続的な企業成長を標榜しており、事業の拡大に必要な資金需要に対応した効率的な資金調達を図り、健全な財務バランスを追求していく方針であります。

⑤ セグメントごとの状況に関する認識及び分析・検討内容

鉄鋼事業の売上高は前連結会計年度に比べ18.4%増の931,948百万円、セグメント利益は12.4%増の20,324百万円となりました。鋼材需要は人手不足や物流面の課題などにより、期待されたような盛り上がりには欠けましたが、各製造業分野および建設分野とも堅調に推移し、当社の取扱量も前連結会計年度を若干上回る水準を達成しました。また、価格面では前連結会計年度後半から主原料価格の上昇を受けて、鉄鋼メーカーが値上げ方針を打ち出して以降、製造業向け紐付き価格、流通業向け店売り価格ともに上昇し、国際市況も中国の地条鋼生産禁止措置を受けて、供給がタイト化したことから、強含みで推移する期間が長く、売上高の増加に寄与しました。利益面でも市況の上昇により、店売り分野で子会社含め増益となった他、海外のコイルセンターで販売価格の値上げが先行して進んだことによる利幅の増加や現地通貨高による為替差益の発生などから、増益となりました。

金属原料事業の売上高は前連結会計年度に比べ50.9%増の203,200百万円、セグメント利益は250.7%増(約3.5倍)の4,958百万円となりました。中国での鋼材の増産により副原料である合金鉄の需要が増加する一方で、環境規制などの影響もあり、合金鉄価格が上昇、ニッケル価格も当連結会計年度当初は鉱石輸出の再開の動きなどから弱い時期があったものの、その後、供給不足懸念などもあり持ち直して、金属価格は全般的に高い水準にありました。加えて生産者に一部出資もしているクロム系やマンガン系の合金鉄の取り扱いが伸びたことも売上高を押し上げました。また、利益面では、販売増による利益増に加え、前連結会計年度では赤字だった昭和メタル㈱の収益改善や年度末に円高に転じたことによる外貨建て債務の時価換算益も寄与しました。

非鉄金属事業の売上高は前連結会計年度に比べ25.1%増の99,060百万円、セグメント利益は87.9%増の2,038百万円となりました。LMEなどの国際商品価格は中国での環境規制や米国の追加関税などの影響もあり、強含みで推移、中国で雑品スクラップの規制が強化されたことから、品質の良い銅スクラップの取り扱いが増えたことも売上高を押し上げました。また、利益面では、銅スクラップやアルミニウムスクラップの販売収益の増加に加え、前連結会計年度の為替差損が当連結会計年度では差益となったことも増益要因となりました。

食品事業の売上高は前連結会計年度に比べ11.8%増の99,477百万円、セグメント利益は63.2%減の1,057百万円となりました。海外の産地では水揚げが低調であったり、漁獲量の枠が削減された一方で、現物在庫は低水準にあったことから、カニやエビ、サケ類の価格は総じて高止まりし、取扱数量も前連結会計年度比若干増となっ

たため、増収となりました。一方、利益面では、前連結会計年度では高値の販売価格に対して、仕入れコストが上昇途上であったため、利幅が広がりましたが、当連結会計年度では仕入れコストがさらに上昇する中で、販売市況は高値が続いたことから需要が弱まり、一部商品で軟調に転じたことから利幅が縮小し、減益となりました。

石油・化成品事業の売上高は前連結会計年度に比べ9.0%減の240,695百万円、セグメント利益は12.0%減の2,164百万円となりました。原油価格はOPECの協調減産などにより緩やかな上昇基調を維持し、石油製品の販売価格も元売りの価格政策により、上昇基調にありましたが、元売り業界の再編の影響から、従来、商社が取り扱ってきたスポット取引や元売り間の需給調整取引市場が大きく縮小し、取扱量を落とした結果、減収となりました。また、利益面でも石油販売数量の減少による収益低下に加え、前連結会計年度はレジ袋などの輸入化成品雑貨類がコスト低下により採算が良く、利益を押し上げましたが、当連結会計年度では利幅が平準化したことも、利益を引き下げました。

海外販売子会社の売上高は前連結会計年度に比べ27.2%増の221,678百万円、セグメント利益は383.4%増（約4.8倍）の950百万円となりました。シンガポールに船用石油の商権を移管したことからシンガポールの石油製品の取扱いが増加した他、タイやシンガポールでの非鉄金属スクラップ類やインドネシアや米国での鋼材販売が増加したことも売上高を押し上げました。また、利益面ではシンガポールやインドネシアでの売上高の増加に伴う利益増加が寄与し、増益となりました。

その他の事業の売上高は前連結会計年度に比べ4.9%増の76,598百万円、セグメント利益は54.7%減の691百万円となりました。木材事業では住宅メーカー向けの直需取引を増やし、売上規模を拡大していますが、利益面では為替変動の影響などからコスト増となり、減益となりました。また、機械事業では前連結会計年度ではレジャー機械の完工収入が利益に貢献しましたが、当連結会計年度では完工がなかったことから減収減益となりました。

4 【経営上の重要な契約等】

特記すべき事項はありません。

5 【研究開発活動】

特記すべき事項はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループにおける当連結会計年度の設備投資の総額は5,941百万円(無形固定資産を含む。)であり、セグメントごとの主な内容は次のとおりであります。

鉄鋼、金属原料、非鉄金属、食品、石油・化成品及び海外販売子会社の各事業では、既存設備の維持・更新を中心としてそれぞれ4,803百万円、47百万円、127百万円、11百万円、99百万円及び48百万円の設備投資となりました。

その他の事業では、(株)ハローズにおけるアミューズメント施設の設備更新などにより、760百万円の設備投資となりました。

また、前連結会計年度末に計画中であった重要な設備の新設のうち、当連結会計年度において完了したものは次のとおりであります。

提出会社

名称 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	投資総額 (百万円)	資金調達 方法	完了年月
北関東 スチールセンター (群馬県伊勢崎市)	鉄鋼事業	保管及び 加工設備	1,847	自己資金	平成29年7月

(注) 1 上記の金額には、消費税等の金額は含まれておりません。

2 連結会社以外へ一部を賃貸しております。

なお、当連結会計年度において重要な設備の除却又は売却はありません。

2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

(平成30年3月31日現在)

名称 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)				従業員数 (名)
			建物及び 構築物	土地 (面積㎡)	その他	合計	
大阪本社 (大阪市中央区)	鉄鋼事業、金属原料事業、非鉄金属事業、食品事業、石油・化成品事業、その他	本社 オフィス	2,890	1,384 (1,407)	140	4,414	363 [72]
東京本社 (東京都中央区) (注) 3	鉄鋼事業、金属原料事業、非鉄金属事業、食品事業、石油・化成品事業、その他	本社 オフィス	215	— (—)	139	354	684 [83]
名古屋支社 (名古屋市中村区) (注) 4	鉄鋼事業、金属原料事業、非鉄金属事業、食品事業、石油・化成品事業、その他	支社 オフィス	138	— (—)	63	202	160 [9]
堺流通センター (堺市堺区) (注) 5	鉄鋼事業	保管及び 加工設備	3,785	5,784 (92,356)	1,099	10,670	37 [4]
北関東 スチールセンター (群馬県伊勢崎市) (注) 5	鉄鋼事業	保管及び 加工設備	1,448	599 (26,769)	275	2,322	8 [—]
新阪和ビル (東京都中央区) (注) 6	その他	賃貸用 オフィス	151	2,668 (1,189)	0	2,819	— [—]

(注) 1 帳簿価額のうち「その他」は、「機械及び装置」、「車両運搬具」、「工具、器具及び備品」及び「リース資産」の合計であります。

2 「従業員数」の[外書]は、臨時従業員の年間平均雇用人員数であります。

- 3 建物の一部を連結会社以外から賃借しております。なお、年間賃借料は687百万円であります。
- 4 建物の一部を連結会社以外から賃借しております。なお、賃借料は161百万円であります。また、名古屋支社は平成29年5月にオフィスを移転しており、当該賃借料には旧名古屋支社ビル(名古屋市中区)に対する賃借料を含んでおりません。
- 5 連結会社以外へ一部を賃貸しております。
- 6 連結会社以外へ賃貸しております。
- 7 現在休止中の主要な設備はありません。

(2) 国内子会社

(平成30年3月31日現在)

会社名	名称 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)				従業員数 (名)
				建物及び 構築物	土地 (面積㎡)	その他	合計	
阪和流通センター 東京㈱ (注)3、(注)4	本社 (千葉県習志野市)	鉄鋼事業	保管及び 加工設備	1,556	— (—)	226	1,782	37 [9]
阪和流通センター 名古屋㈱ (注)4	本社 (愛知県海部郡 飛島村)	鉄鋼事業	保管及び 加工設備	1,321	2,269 (74,340)	690	4,281	44 [12]
阪和スチールサー ビス㈱ (注)4	本社 (滋賀県甲賀市)	鉄鋼事業	保管及び 鋼板加工 設備	515	622 (23,347)	619	1,757	75 [7]
三栄金属㈱	南港流通センター等 (大阪市住之江区)	鉄鋼事業	保管及び 加工設備	149	1,670 (25,219)	35	1,855	34 [1]
㈱ダイサン	南港倉庫 (大阪市住之江区)	鉄鋼事業	保管及び 加工設備	135	1,793 (21,847)	61	1,989	— [—]
㈱ダイサン	浦安第一倉庫等 (千葉県浦安市)	鉄鋼事業	保管及び 加工設備	94	1,405 (9,343)	28	1,529	17 [—]

- (注) 1 帳簿価額のうち「その他」は、「機械及び装置」、「車両運搬具」、「工具、器具及び備品」、「建設仮勘定」及び「リース資産」の合計であります。
- 2 「従業員数」の「外書」は、臨時従業員の年間平均雇用人員数であります。
- 3 上記の他、「土地(65,874㎡)」を連結会社以外から賃借しております。なお、年間賃借料は430百万円です。
- 4 「建物及び構築物」、「土地」及び「その他」の一部を提出会社から賃借しております。
- 5 現在休止中の主要な設備はありません。

(3) 在外子会社

(平成30年3月31日現在)

会社名	名称 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)				従業員数 (名)
				建物及び 構築物	土地 (面積㎡)	その他	合計	
長富不銹鋼中心 (蘇州)有限公司 (注)3	本社 (太倉、中国)	鉄鋼事業	鋼板加工 設備	792	— (66,666)	624	1,417	229 [6]
HANWA STEEL SERVICE (THAILAND) CO., LTD	本社 (Chonburi, Thailand)	鉄鋼事業	鋼板加工 設備	808	262 (40,260)	398	1,469	206 [—]
阪和鋼板加工 (東莞)有限公司 (注)3	本社 (東莞、中国)	鉄鋼事業	鋼板加工 設備	366	— (66,313)	323	690	125 [—]
PT. HANWA STEEL SERVICE INDONESIA (注)3	本社 (Bekasi, Indonesia)	鉄鋼事業	鋼板加工 設備	1,019	— (37,255)	1,199	2,219	128 [72]

- (注) 1 帳簿価額のうち「その他」は、「機械及び装置」、「車両運搬具」、「工具、器具及び備品」、「建設仮勘定」及び「リース資産」の合計であります。
- 2 「従業員数」の〔外書〕は、臨時従業員の年間平均雇用人員数であります。
- 3 土地を連結会社以外から賃借しております。
- 4 現在休止中の主要な設備はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

- (1) 重要な設備の新設等
重要な設備の新設等の計画はありません。
- (2) 重要な設備の除却等
重要な設備の除却等の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	114,000,000
計	114,000,000

(注) 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で当社普通株式5株を1株とする株式併合に伴う定款変更が行われ、発行可能株式総数は456,000,000株減少し、114,000,000株となっております。

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (平成30年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成30年6月25日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	42,332,640	同左	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数は100 株であります。
計	42,332,640	同左	—	—

(注) 1 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で当社普通株式5株を1株に株式併合いたしました。これにより、発行済株式総数は169,330,560株減少し、42,332,640株となっております。

2 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会において、株式併合に係る議案が承認可決されました。これにより、株式併合の効力発生日(平成29年10月1日)をもって、単元株式数が1,000株から100株に変更となっております。

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成29年10月1日	△169,330,560	42,332,640	—	45,651	—	—

(注) 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で当社普通株式5株を1株に株式併合いたしました。これにより、発行済株式総数は169,330,560株減少し、42,332,640株となっております。

(5) 【所有者別状況】

(平成30年3月31日現在)

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	50	34	274	215	9	6,414	6,996	—
所有株式数(単元)	—	147,747	4,017	54,650	106,530	116	109,797	422,857	46,940
所有株式数の割合(%)	—	34.94	0.95	12.92	25.19	0.03	25.97	100.00	—

(注) 1 自己株式1,694,375株は、「個人その他」に16,943単元、「単元未満株式の状況」に75株含まれております。

2 「その他の法人」には、証券保管振替機構名義の株式54単元が含まれております。

3 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会において、株式併合に係る議案が承認決議されました。これにより、株式併合の効力発生日(平成29年10月1日)をもって、単元株式数が1,000株から100株に変更となっております。

(6) 【大株主の状況】

(平成30年3月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-11	3,673	9.04
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	2,565	6.31
阪和興業取引先持株会	大阪府大阪市中央区伏見町4丁目3-9	1,613	3.97
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口9)	東京都中央区晴海1丁目8-11	1,560	3.84
株式会社三井住友銀行	東京都千代田区丸の内1丁目1番2号	1,526	3.76
JP MORGAN CHASE BANK 385632(常任代理人 株式会社みずほ銀行決済営業部)	25 BANK STREET, CANARY WHARF, LONDON, E14 5 JP, UNITED KINGDOM(東京都港区港南2丁目15-1)	979	2.41
阪和興業社員持株会	東京都中央区築地1丁目13-1	820	2.02
GOVERNMENT OF NORWAY(常任代理人 シティバンク、エヌ・エイ東京支店)	BANKPLASSEN 2, 0107 OSLO 1 OSLO 0107 NO(東京都新宿区新宿6丁目27番30号)	785	1.93
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5)	東京都中央区晴海1丁目8-11	703	1.73
新日鐵住金株式会社	東京都千代田区丸の内2丁目6-1	600	1.48
計	—	14,827	36.49

(注) 1 上記のほか、当社所有の自己株式1,694千株(持分比率4.00%)があります。

2 平成30年3月22日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書の変更報告書において、三井住友信託銀行株式会社、三井住友トラスト・アセットマネジメント株式会社及び日興アセットマネジメント株式会社が平成30年3月15日現在で以下の株式を保有している旨の記載がされているものの、当社として平成30年3月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

なお、大量保有報告書の変更報告書の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数(千株)	株券等保有割合(%)
三井住友信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号	1,935	4.57
三井住友トラスト・アセットマネジメント株式会社	東京都港区芝三丁目33番1号	213	0.50
日興アセットマネジメント株式会社	東京都港区赤坂九丁目7番1号	434	1.03
計	—	2,583	6.10

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

(平成30年3月31日現在)

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 1,694,300	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 40,591,400	405,914	—
単元未満株式	普通株式 46,940	—	—
発行済株式総数	42,332,640	—	—
総株主の議決権	—	405,914	—

(注) 1 「完全議決権株式(その他)」の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式5,400株(議決権54個)が含まれております。

2 1単元の株式数は100株であります。

3 「単元未満株式」には、当社所有の自己株式75株が含まれております。

② 【自己株式等】

(平成30年3月31日現在)

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
(自己保有株式) 阪和興業株式会社	東京都中央区築地 1丁目13番1号	1,694,300	—	1,694,300	4.00
計	—	1,694,300	—	1,694,300	4.00

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

会社法第155条第3号、第7号及び第9号の規定に基づく普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(平成29年11月10日)での決議状況 (取得期間平成29年11月10日)	399	1,709,715
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	399	1,709,715
残存決議株式の総数及び価額の総額	—	—
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	—	—
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合(%)	—	—

(注) 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で当社普通株式5株を1株に株式併合いたしました。この株式併合により生じた1株に満たない端数の処理について、会社法第235条第2項、第234条第4項及び第5項の規定に基づく自己株式の買取りを行ったものであります。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	3,782	4,572,975
当期間における取得自己株式	53	279,360

(注) 1 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で当社普通株式5株を1株に株式併合いたしました。当事業年度における取得自己株式3,782株の内訳は、株式併合前3,375株、株式併合後407株となっております。

2 「当期間における取得自己株式」欄には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他(単元未満株式の買増請求に基づき売渡した取得自己株式)	—	—	—	—
その他(株式併合による減少)	6,774,279	2,571	—	—
保有自己株式数	1,694,375	—	1,694,428	—

(注) 1 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で当社普通株式5株を1株に株式併合いたしました。当事業年度における処分価額の2,571円は、株式併合により生じた1株に満たない端数(0.6株)の売渡しによるものであります。

2 当期間における「その他(単元未満株式の買増請求に基づき売渡した取得自己株式)」欄には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡しによる株式数は含めておりません。

3 当期間における「保有自己株式数」欄には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までに取得した株式数及び単元未満株式の売渡しによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、株主への継続的な利益の還元を経営の最重要政策の一つとして考えております。株主に対しては安定した配当を継続して実施することを第一義とするとともに、不断に収益力の向上に努め、基礎的な収益水準の上昇とともに戦略的投資からの利益回収状況に合わせて、配当額の増加を目指してまいります。

当社の剰余金の配当回数は、中間配当と期末配当の年2回を基本的な方針としており、これらの配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会としております。

内部留保金につきましては、経営基盤の強化並びに成長事業・新規事業等への積極投資に活用し、企業価値の向上に努めていく所存であります。

当事業年度の剰余金配当につきましては、業績が期初予想に比べ上振れたことから、当連結会計年度が創立70周年であったことも勘案して、1株当たり期末配当金を65円の普通配当と10円の記念配当を合わせた75円といたしました。これにより既に実施いたしました中間配当1株当たり10円(平成29年10月1日実施の5株を1株とする株式併合後換算では50円相当)と合わせた当事業年度の1株当たり年間配当は、125円相当となっております。

なお、当社は会社法第454条第5項に規定する中間配当をすることができる旨を定款に定めております。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
平成29年11月10日 取締役会	2,031	10.00
平成30年6月22日 定時株主総会	3,047	75.00

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第67期	第68期	第69期	第70期	第71期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高(円)	576	517	598	848	873 (5,570)
最低(円)	315	358	398	436	710 (3,725)

(注) 1 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

2 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で当社普通株式5株を1株に株式併合いたしました。第71期の株価については、株式併合前の最高・最低株価を記載し、()内に株式併合後の最高・最低株価を記載しております。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年 10月	11月	12月	平成30年 1月	2月	3月
最高(円)	4,310	4,600	5,270	5,570	5,530	4,800
最低(円)	3,960	3,895	4,400	5,080	4,705	4,180

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5 【役員 の 状 況】

男性19名 女性一名 (役員のうち女性の比率—%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
代表取締役 社長	—	古川 弘成	昭和21年10月30日生	昭和44年3月 当社入社 平成8年4月 阪和(香港)有限公司副社長兼アジア地域副支配人(中国・香港) 平成9年6月 取締役に就任 平成15年4月 常務取締役に就任 平成17年4月 専務取締役に就任 平成21年4月 代表取締役副社長に就任 平成23年4月 代表取締役社長に就任	(注)4	265
代表取締役 副社長 執行役員	全社鉄鋼総轄	芹澤 浩	昭和26年12月26日生	昭和50年4月 当社入社 平成17年4月 理事 東京鋼板担当兼厚板・鋼板販売部長 平成17年6月 取締役に就任 平成22年4月 常務取締役に就任 平成24年4月 取締役専務執行役員に就任 平成27年4月 取締役副社長執行役員に就任 平成29年4月 代表取締役副社長執行役員に就任	(注)4	99
取締役 専務 執行役員	海外営業第一・海外営業第二・貿易業務・木材統轄	加藤 恭道	昭和30年4月26日生	昭和53年4月 当社入社 平成21年4月 理事 大阪厚板・鋼板建材・鋼板販売担当 平成22年6月 取締役に就任 平成24年4月 取締役常務執行役員に就任 平成28年4月 取締役専務執行役員に就任	(注)4	234
取締役 専務 執行役員	東京条鋼部門・東京鋼板部門・線材特殊鋼チタン・北海道支店・東北支店・新潟支店・北関東支店統轄兼 東京機械担当補佐	長嶋 日出海	昭和35年2月15日生	昭和58年4月 当社入社 平成23年4月 理事 東京厚板・鋼板販売・鋼板建材第一・鋼板建材第二・北海道支店担当 平成24年4月 執行役員に就任 平成27年6月 取締役執行役員に就任 平成28年4月 取締役常務執行役員に就任 平成29年4月 取締役専務執行役員に就任	(注)4	88
取締役 専務 執行役員	非鉄金属・金属原料・特殊金属総轄 兼 管理部門統轄	中川 洋一	昭和36年8月14日生	昭和61年4月 当社入社 平成25年4月 理事 経理・関連事業担当 兼 経理部長 兼 関連事業部長 平成26年4月 執行役員に就任 平成27年6月 取締役執行役員に就任 平成28年4月 取締役常務執行役員に就任 平成29年4月 取締役専務執行役員に就任	(注)4	40
取締役 専務 執行役員	エネルギー部門・食品部門統轄 兼 業務管理担当	倉田 泰晴	昭和34年9月12日生	昭和57年4月 当社入社 平成23年4月 理事 アジア地域支配人(アセアン・インド・中東)鉄鋼・機械を除く部門担当 兼 HANWA SINGAPORE (PRIVATE) LTD. 会長 平成24年4月 執行役員に就任 平成28年4月 常務執行役員に就任 平成28年6月 取締役常務執行役員に就任 平成29年4月 取締役専務執行役員に就任	(注)4	16

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
取締役	—	関 收	昭和14年8月23日生	昭和37年4月 通商産業省入省 昭和62年6月 大阪通商産業局長 平成元年6月 大臣官房総務審議官 平成2年6月 防衛庁装備局長 平成4年6月 中小企業庁長官 平成5年6月 通商産業省退官 平成7年6月 住友電気工業(株)常務取締役に就任 平成11年6月 同社代表取締役副社長に就任 平成14年6月 (株)ビーエス三菱社外取締役に就任 平成16年6月 原子燃料工業(株)代表取締役会長に就任 平成19年6月 当社取締役に就任 平成24年2月 弁護士登録(尚友法律事務所)(現任) 平成27年12月 マッハコーポレーション(株)社外取締役に就任 平成28年9月 一般社団法人日本ダイバーシティ・マネジメント推進機構理事長に就任(現任) (主要な兼職) 弁護士(尚友法律事務所)	(注)4	61
取締役	—	堀 龍兒	昭和18年9月3日生	昭和41年4月 岩井産業(株)(現 双日(株))入社 平成8年6月 日商岩井(株)(現 双日(株))取締役に就任 平成12年6月 同社常務取締役に就任 平成14年6月 同社専務執行役員に就任 平成15年4月 早稲田大学法学部教授 平成16年4月 早稲田大学大学院法務研究科教授 平成17年6月 (株)トクヤマ社外監査役に就任 平成23年6月 リスクモンスター(株)社外取締役に就任(現任) 平成24年6月 (株)T&Dホールディングス社外取締役に就任(現任) 平成25年4月 学校法人早稲田大阪学園 専務理事・学園長(現任) 平成26年4月 TMI総合法律事務所顧問に就任(現任) 早稲田大学名誉教授(現任) 平成26年6月 当社取締役に就任 平成28年5月 (株)ニシキ社外取締役に就任(現任) (主要な兼職) リスクモンスター(株)社外取締役 (株)T&Dホールディングス社外取締役 学校法人早稲田大阪学園 専務理事・学園長	(注)4	7
取締役	—	手島 達也	昭和21年7月12日生	昭和44年4月 東邦亜鉛(株)に入社 平成11年6月 同社取締役に就任 平成12年6月 同社執行役員に就任 平成14年1月 同社常務執行役員に就任 平成14年6月 同社常務取締役 兼 常務執行役員に就任 平成15年6月 同社代表取締役常務 兼 常務執行役員に就任 平成17年6月 同社代表取締役専務 兼 専務執行役員に就任 平成18年6月 同社代表取締役社長 兼 最高執行責任者に就任 平成20年6月 同社代表取締役社長に就任 平成29年6月 同社相談役に就任(現任) 平成29年6月 古河機械金属(株)社外取締役に就任(現任) 平成30年6月 当社取締役に就任 (主要な兼職) 古河機械金属(株)社外取締役 東邦亜鉛(株)相談役	(注)4	—
取締役 常務 執行役員	大阪条鋼部 門・機械・大 阪厚板・九州 支社・中国支 店統轄	山本 浩雅	昭和35年3月18日生	昭和58年4月 当社入社 平成24年4月 理事 機械・大阪厚板担当 兼 機械部長 平成25年4月 執行役員に就任 平成26年6月 取締役執行役員に就任 平成28年4月 取締役常務執行役員に就任	(注)4	109

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
取締役 常務 執行役員	大阪鋼板建材 第一・鋼板建 材第二・鋼板 販売・薄板第 一・薄板第 二・アルミス テンレス・線 材特殊鋼・ス チールサービ ス事業推進統 轄	畠中 康司	昭和35年8月30日生	昭和58年4月 当社入社 平成24年8月 理事 大阪薄板第一・薄板第二・薄板第 三・スチールサービス事業推進担当 兼 東京薄板国際担当補佐 兼 大阪本社薄板 第三部長 平成25年4月 執行役員に就任 平成26年6月 取締役執行役員に就任 平成28年4月 取締役常務執行役員に就任	(注) 4	46
取締役 常務 執行役員	名古屋支社 長、静岡営業 所統轄	篠山 陽一	昭和36年11月8日生	昭和59年4月 当社入社 平成24年4月 理事 東京薄板担当 兼 薄板部長 平成26年4月 執行役員に就任 平成29年4月 常務執行役員に就任 平成29年6月 取締役常務執行役員に就任	(注) 4	10
取締役 常務 執行役員	非鉄金属・金 属原料・特殊 金属統轄 兼 業務管理担当	出利葉 知郎	昭和36年10月3日生	昭和59年4月 当社入社 平成22年4月 理事 非鉄金属・特殊金属担当 平成24年4月 執行役員に就任 平成29年6月 取締役執行役員に就任 平成30年4月 取締役常務執行役員に就任	(注) 4	78
取締役 常務 執行役員	全社鉄構営業 事業・全社製 鋼原料事業統 轄 兼 東京条 鋼部門・北海 道支店・東北 支店・北関東 支店担当	口石 隆敏	昭和33年10月23日生	昭和56年4月 当社入社 平成22年4月 理事 東京条鋼建材第一・条鋼建材第 二・製鋼原料・鉄構営業・流通販売・東 北支店・新潟支店・北関東営業所担当 兼 全社鉄構事業推進調整担当 平成22年6月 取締役に就任 平成22年9月 上海阪飛信息技术有限公司董事長(現 任) 平成24年4月 取締役執行役員に就任 平成26年6月 執行役員に就任 平成29年4月 常務執行役員に就任 平成30年6月 取締役常務執行役員に就任 (主要な兼職) 上海阪飛信息技术有限公司董事長	(注) 4	82
監査役 (常勤)	—	川西 英夫	昭和25年3月15日生	昭和48年4月 当社入社 平成17年4月 理事 大阪厚板・鋼板販売・鋼板建材担 当 平成17年6月 取締役に就任 平成20年4月 常務取締役に就任 平成24年4月 取締役専務執行役員に就任 平成26年4月 取締役副社長執行役員に就任 平成29年6月 取締役副社長執行役員退任 監査役(常勤)に就任	(注) 5	221
監査役 (常勤)	—	小笠原 朗彦	昭和28年9月30日生	昭和51年4月 当社入社 平成18年4月 理事 非鉄金属・金属原料・特殊金属担当 兼 金属原料部長 平成18年6月 取締役に就任 平成23年4月 常務取締役に就任 平成24年4月 取締役常務執行役員に就任 平成25年4月 取締役専務執行役員に就任 平成30年6月 取締役専務執行役員退任 監査役(常勤)に就任	(注) 6	93
監査役	—	名出 康雄	昭和21年8月14日生	昭和46年4月 住友重機械工業㈱入社 平成13年6月 同社常務執行役員に就任 平成15年6月 同社専務執行役員に就任 平成18年12月 住友重機械エンパイロメント㈱代表 取締役社長に就任 平成22年4月 住友重機械ビジネスアソシエイツ㈱ 代表取締役社長に就任 平成24年3月 同社取締役退任 平成24年6月 当社監査役に就任	(注) 7	482

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
監査役	—	大久保 克則	昭和29年 8 月 5 日生	昭和53年 4 月 ㈱住友銀行(現 ㈱三井住友銀行)入行 平成18年 4 月 同行執行役員に就任 平成22年 4 月 同行常務執行役員に就任 平成25年 4 月 同行常務執行役員退任 平成25年 5 月 同行顧問に就任(現任) 平成26年 6 月 当社監査役に就任	(注) 8	—
監査役	—	平形 光男	昭和29年 2 月 5 日生	昭和52年 4 月 ㈱日本興業銀行(現 ㈱みずほ銀行)入行 平成14年 4 月 ㈱みずほコーポレート銀行(現 ㈱みずほ銀行)ポートフォリオマネジメント部長 平成18年 3 月 同行常勤監査役に就任 平成21年 4 月 みずほ証券㈱常務執行役員に就任 平成24年 6 月 東洋建設㈱常勤監査役に就任 平成27年 9 月 東京ベイヒルトン㈱代表取締役社長に就任 平成28年 6 月 当社監査役に就任 平成30年 6 月 新日鉄興和不動産㈱社外取締役に就任(現任) (主要な兼職) 新日鉄興和不動産㈱社外取締役	(注) 7	—
計						1,938

- (注) 1 当社は、執行役員制度を導入しております。なお、取締役兼務執行役員は11名、専任の執行役員は12名であります。
- 2 取締役関 収、堀 龍児、手島 達也は、「社外取締役」であります。
- 3 監査役名出 康雄、大久保 克則、平形 光男は、「社外監査役」であります。
- 4 取締役の任期は、平成30年 3 月期に係る定時株主総会終結の時から平成31年 3 月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 5 監査役の任期は、平成29年 3 月期に係る定時株主総会終結の時から平成33年 3 月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 6 監査役の任期は、平成30年 3 月期に係る定時株主総会終結の時から平成32年 3 月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 7 監査役の任期は、平成28年 3 月期に係る定時株主総会終結の時から平成32年 3 月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 8 監査役の任期は、平成27年 3 月期に係る定時株主総会終結の時から平成31年 3 月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 9 「所有株式数」には、平成30年 5 月末現在の当社役員持株会における各自の持分株数を含んでおります。
- 10 平成29年 6 月29日開催の第70回定時株主総会決議により、平成29年10月 1 日付で普通株式 5 株を 1 株とする株式併合を行っております。上記表中の株数は、当該株式併合による調整を反映しております。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は良き企業市民たるべき社会的責務を果たし、当社のステークホルダーから「価値ある企業」との評価・支持を得るため、法令及び社会規範を順守した透明性に優れた経営体制の確立を目指しております。

また、企業の社会的責任への活動を積極的に推進し、存在を評価される企業ブランドの確立を目指して、「CSR委員会」を設立してCSR経営を推進しております。

② 企業統治体制の概要（社内組織体制及び人数は、本報告書提出日現在です。）

イ. 企業統治体制の基本説明

当社は監査役設置会社の形態を採用しております。監査役会は株主総会において選任された監査役5名（内、社外監査役3名）から構成され、経営の意思決定及び業務監督機関である取締役会並びに業務執行機関である経営会議以下の会社組織の業務執行に対して監視・検証を行い、監査役会においてその結果を承認し、株主総会に報告しております。

取締役会は、株主総会において選任された取締役14名（内、社外取締役3名）から構成され、当社グループにとって重要な経営の企画立案及び業務執行の監督を行うため、原則として毎月1回の頻度で開催しております。なお、当社は定款において、取締役の人数は25名以内とする旨を定めております。

また、当社は取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び累積投票によらない旨を定款に定めております。

当社は平成24年4月より、よりきめ細かな業務執行体制を構築し、意思決定の迅速化及び効率化を図るため、執行役員制度を導入しております。

経営会議は、全執行役員から構成され、当社グループの経営判断に係る重要な事項を取締役に議題提出するとともに、最高業務執行機関として、取締役会にて決定された経営方針に沿った業務執行を迅速に推進するため、原則として毎月2回の頻度で開催しております。

役員評価につきましては、社長を委員長とし社外取締役も参加する役員評価委員会にて決定する仕組みを導入し、委員会を年2回以上開催し、各役員からのコミットメントの評価及び役員相互評価を受けた各役員の総合評価を行っております。また、役員評価委員会の内部組織として、役員報酬を答申する報酬会議及び役員人事を答申する選任会議をそれぞれ設置しています。

役員報酬につきましては、役員評価委員会の総合評価の結果を受けて、いわゆる報酬委員会に相当する社外取締役も参加する報酬会議にて検討の上、月例固定報酬となる定期同額給与案を作成し、取締役会にて決定しております。また、役員賞与については、役員の成果責任をより明確に反映させる業績連動給与制を採用しており、各年度の業績連動給与の算定ルール案を役員評価委員会で検討の上、取締役会にて決定、監査役の同意を得ております。

役員人事につきましては、いわゆる指名委員会に相当する社外取締役も参加する選任会議にて、役員評価や社員の人事考課の結果を基に、次年度の役員構成を検討、素案を作成し、取締役会に答申、取締役会にて役員候補として定時株主総会の議案としております。

当社は自己株式の取得について、経営環境や財政状態などの変化に応じて機動的に実施することを可能にするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款で定めております。

当社は株主への機動的な利益還元を行うことを目的として、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として中間配当ができる旨を定款で定めております。

また、当社は取締役及び監査役がその期待される役割を十分に発揮できることを目的として、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議をもって同法第423条第1項の取締役（取締役であった者を含む。）及び監査役（監査役であった者を含む。）の責任を法令の限度において免除することができる旨を定款で定めております。

ロ. 現状の体制を採用している理由

当社は広範な分野にて事業展開しており、それぞれの分野で「流通のプロ」としての高い専門性を特色としております。そのような業態にあつては、株主から負託された経営責任をしっかりと認識した上で、当社の業務に精通した社内取締役を中心にして、日々の経営判断及び取締役会を通じた重要な経営事項の審議、決定を行い、社外監査役も含めた監査役からその監視・検証を受ける監査役会設置会社の方がより適していると判断しております。しかしながら一方で株主を始めとするステークホルダーに対し経営判断の透明性の向上や説明責

- ロ. 当社の取締役の職務執行に係る情報の保存及び管理に関する体制
- a) 当社は取締役の職務執行に係る情報を適正に書面又は電子文書（以下、文書という。）に記録し、法令及び当社の定める文書管理規程に基づき保存及び管理する。
 - b) 文書事務責任者は保存文書の紛失・破損等に留意し、必要な場合は施錠等（パスワード等によるアクセス制限を含む。）により、適正に管理する。
- ハ. 阪和興業グループの損失の危険の管理に関する規程その他の体制
- a) 当社の取締役、執行役員、理事、各部門長及び子会社の社長は法務審査部と連携し、各担当部署及び各子会社に与信管理規程及び営業部門業務規程の適正な運用を周知徹底させることにより営業リスクを管理し、その軽減を図るものとする。また、当社は新規事業及び投融資案件の審査機関として、投資等審査委員会を設置し、阪和興業グループの投資リスクを審査し、審査結果を当該案件の決裁者に報告する。
 - b) 当社はコンプライアンス、環境、災害、情報セキュリティ及び貿易管理等について、総務部、情報システム部及び法務審査部等が連携し、社内規程・マニュアル等に基づき各担当部署がそのリスクを管理する。また、コンプライアンス委員会、安全保障貿易管理委員会等の各種委員会が諮問機関となり各担当部署への指導・啓蒙を行い、必要に応じて社外弁護士等からのアドバイスを受ける。
 - c) 当社の人事部、監査部及び経営企画部等は関係部署と連携して阪和興業グループのリスク管理の周知徹底を図るため、必要な教育・啓蒙を行う。
 - d) 阪和興業グループのリスク管理の実効状況を検証するため、監査部は当社の国内外拠点、国内グループ会社及び海外現地法人等に対し予め定めた監査計画に基づきモニタリングを行い、適宜経営会議及び社長に内部監査報告を行う。また、担当する取締役が年4回阪和興業グループ各社の状況を取締役に報告する。
 - e) 当社は会社情報の開示に関して、ディスクロージャー規程を定めるとともに、ディスクロージャー委員会が開示情報の重要性・妥当性の判断を行うことにより公正かつ適時・適切な情報開示を進める。
 - f) 当社はグループ会社管理規程及びグループ会社財務管理規程に基づき、当社の子会社について適切な権限管理体制や報告体制を構築することで、当社の子会社に係るリスクを適正に管理する。
 - g) 当社は各部門及びグループ会社ごとに、業務手順に内在するリスクの洗い出しや各リスクに対する対応策の整理等を行い、業務リスクを適正にコントロールするための活動（HKQC活動＝Hanwa Knowledge Quality Control）を推進する。
- ニ. 阪和興業グループの取締役の職務執行が効率的に行われることを確保するための体制
- a) 当社は取締役会を原則月1回開催し、阪和興業グループにとっての重要な経営の立案及び業務執行の監督を行う。また、経営会議を原則月2回開催し、経営に関する重要事項を協議・決定する。さらに取締役は、取締役会付議基準に則り阪和興業グループの経営判断に係る重要な事項を取締役に議案として上程する。
 - b) 当社は当社の子会社にその業務執行状況の報告を毎月させるとともに、東京本社、大阪本社、名古屋支社の各店で原則月1回開催する各営業部門の月次報告会において、国内子会社の一部も含めて報告を受け、阪和興業グループの営業の方向性、効率性及び内在するリスクの有無等を検証する。
 - c) 当社は中長期的な経営戦略を実現するために中期経営計画や年次経営計画を策定し、その進捗状況を検証するため、各業務部門及び子会社を対象とした定期的な目標会議の運営等を通じて、業務の評価及び業務の遂行状況のチェック等（計画の見直しや計画達成のための方法の変更等を含む。）を行い、職務執行の効率性の向上を図る。
 - d) 当社は社長を委員長とし、助言役としての社外取締役を含む委員にて構成される役員評価委員会を年2回以上開催し、各取締役、執行役員個々人の業務執行に係る重要事項の表明及び役員相互評価を受けて各取締役の総合評価を行い、当該委員会における報酬会議並びに選任会議において役員報酬及び役員人事を各々適正に決定する。
- ホ. 阪和興業グループにおける業務の適正を確保するための体制
- a) 当社はグループ会社管理規程に基づき、当社と当社の子会社が相互に連携し円滑な経営を遂行することで、総合的な事業の発展を図る。
 - b) 当社の管掌部門もしくは管掌役員は国内及び海外の子会社の業務状況を把握し、関係部署はその適切な業務執行をサポートするとともに、業務の包括的な管理を行う。

- c) 当社は常勤監査役、監査部及び子会社の監査役その他により構成されるグループ会社監査役連絡会議を適時開催し、当社及び子会社の監査等に関する情報交換を行い、その共有化を図る。
- へ. 当社の監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項、当該使用人の独立性に関する事項及び当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
- 当社は監査役の職務を補助すべき使用人として若干名の使用人を置く。当該使用人は監査役からの要請に応じて調査・報告等を行い、常に監査役との提携を図る。また、当該使用人が監査役より指示・命令を受けた事項については、取締役等からの指揮命令を受けない。
- ト. 阪和興業グループの取締役、執行役員、使用人及び子会社監査役が当社監査役に報告するための体制その他当社監査役への報告に関する体制
- a) 阪和興業グループの取締役、執行役員、使用人及び子会社監査役は法定の事項に加え、重大なリスクの発生及び法令・定款違反について当社の監査役に報告する。また、コンプライアンス委員会委員長はコンプライアンスに関する相談窓口への相談の概要等コンプライアンス上の重要な事項について当社の監査役に報告する。
- 取締役は、取締役会、経営会議その他重要な会議において、業務執行の状況及び重要な意思決定について監査役に報告する。
- b) 当社の監査役が報告を求めた事項については、阪和興業グループの取締役、執行役員、使用人及び子会社の監査役等は迅速かつ的確に対応する。
- c) 監査部は予め定めた監査計画に基づき実行した内部監査の状況を適宜監査役に報告するとともに、必要な場合には監査役の求めに応じて、追加の調査・報告を行う。
- d) 当社は阪和興業グループの取締役、執行役員、使用人及び子会社監査役が前3号に掲げる報告及び対応を行ったことを理由として、当該報告者及び対応者に対して不利益な取扱いを行うことを禁止する。
- チ. 当社の監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- a) 当社の監査役は取締役、執行役員及び使用人と適宜意見交換を行い、必要に応じて取締役会に対し意見表明を行う。また、会計監査人から会計監査に関する説明を受けるとともに意見交換を行うなど連携を図る。
- b) 当社は監査役が取締役会その他重要な会議への出席、重要書類の閲覧、主要部門及び当社の子会社の調査等を行い得る体制を整備する。
- c) 当社は監査役が職務執行について生じる費用の前払いまたは償還等の請求をした場合は、当該監査役の職務執行に必要でないと認められた場合を除き、速やかに当該費用の前払いまたは償還等の処理をする。
- リ. 財務報告の信頼性を確保するための体制（財務報告に係る内部統制システムについて）
- a) 阪和興業グループは財務報告に係る内部統制基本方針書に基づき、財務報告に係る内部統制の評価及び報告を適切に実行し、内部統制報告制度の効率的、実効的な運用を図る。
- b) 阪和興業グループの内部統制の構築及び運用は経営会議がこれを統轄する。経営会議の直轄組織として設置する監査部は、財務報告に係る内部統制の構築及び運用状況の検証・評価を行い、その結果を経営会議に報告する。これを踏まえ、経営会議は必要に応じて是正を行う。
- c) 内部統制委員会は経営会議より委託を受けた阪和興業グループの内部統制の課題を検討し、その結果を経営会議に報告する。また、監査部が実施する阪和興業グループの財務報告に係る内部統制の有効性評価の検証について助言・支援を行うとともに、内部統制報告書について経営会議に対して意見を述べる。

財務報告に係る内部統制評価につきましては、上記の基本方針にもありますように、独立性を確保された監査部内部統制・HKQC推進課が経営会議の直轄組織として、専任スタッフ11名体制で財務報告に係る内部統制の整備・運用状況の有効性評価・検証を行い、必要に応じて改善を促す職務を担っております。また、それらの結果については経営会議に報告しております。

また、当連結会計年度における業務の適正を確保するための体制（内部統制システム）の運用状況の概要は以下のとおりです。

イ. コンプライアンスに関する取組みについて

当社は、平成15年4月に企業倫理理念、企業倫理規範及び企業倫理行動基準を定め、さらに平成18年4月にはコンプライアンス・マニュアルを作成し、配付またはいつでも閲覧可能な状態とし、内容の周知徹底を図る

などコンプライアンス体制の整備に注力してきました。また、当社は平成27年10月にコンプライアンス・マニュアル第4版を発行するとともにコンプライアンスに関する相談窓口の拡充を行いました。当期においても、グループ会社を含めたコンプライアンス体制の構築を目指し、海外子会社等も含めた阪和興業グループの全役職員にコンプライアンス・マニュアルの周知徹底を図るなど、引き続きコンプライアンス体制の拡充に努めました。

ロ. リスク管理への取組みについて

当社は、新規事業・投融資案件、環境、災害、情報セキュリティ及び貿易安全保障上等のリスクについてはそれぞれに対応部署を定めて管理するとともに、諮問機関として各種委員会を設け、その対応をサポートする体制を取っております。

当社では、HKQC (Hanwa Knowledge Quality Control) 活動を継続しています。これにより各部門やグループ会社ごとに、業務手順に内在するリスクの洗い出しや各リスクに対する対応策の整理等を行い、業務リスクを適正にコントロールしていくことを目指しています。

当期において、HKQC活動の実施・運用状況の確認や他部門との情報共有を図るため国内全部門及びグループ会社を対象としたHKQC大会を開催し、リスク管理に係る役職員の意識高進に努めました。

また、大規模災害や感染症の発生に備え策定したBCP (Business Continuity Plan) について、適宜見直しを行っております。

ハ. グループ管理への取組みについて

当社は、グループ会社管理規程、グループ会社財務管理規程及び国内グループ会社会計処理統一規則を策定し、当社グループ会社における適正な権限管理体制や報告体制を構築するとともに、経営企画部にグループ支援課を設置し、効率的、実効的なグループ管理体制の整備を進めております。当期において、グループ会社管理規程の改定を行い、グループ会社に対する当社の支援部署を業務ごとに明確にするとともに、グループ会社から当社への報告事項を明確に規定するなど、グループ管理体制の強化を図りました。また、当社は、当社監査役と当社グループ会社の監査役が情報共有できる場として、グループ会社監査役連絡会議を設けており、当期において当該会議を2回開催しました。

ニ. 取締役の職務執行について

当社は、取締役会規則等に基づき取締役会を原則月1回、経営会議を原則月2回開催することとしており、取締役会では法令や定款等に定められた事項や執行役員も含めた経営会議での協議を経た経営に関する重要事項を決定しております。当期において取締役会を16回、経営会議を24回開催しております。また、取締役会は、各取締役から阪和興業グループにおける業務執行等に関する報告を受け、取締役の職務執行の監督を行っております。

ホ. 監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制等について

阪和興業グループの取締役、執行役員及び使用人並びに子会社監査役は法定の事項に加え、重大なリスクの発生及び法令・定款違反が起こった場合には、その事象を当社の監査役に適時報告する体制を取っております。

コンプライアンス委員会委員長はコンプライアンスに関する相談窓口への相談の概要等コンプライアンス上の重要な事項について当社の監査役への報告体制を確保しております。

取締役は、取締役会、経営会議その他重要な会議において、業務執行の状況及び重要な意思決定について監査役に報告しております。

監査部は、予め定めた監査計画に基づき実行した内部監査の状況を適宜監査役に報告するとともに、必要な場合には監査役の求めに応じて、追加の調査・報告を行っております。

また、代表取締役及び各部門を統轄する取締役は、個別に監査役及び社外取締役と面談し、様々な事項について情報交換を行っております。

なお、当社は監査役による独自の調査等その職務の遂行を補助すべき使用人2名（兼任）を選任しており、監査役の職務執行をサポートする体制を確保しております。

当期においても、引き続き上記の体制を維持し、監査役監査の実効性を確保しました。

④ 内部監査及び監査役監査の状況

内部監査につきましては、監査部監査課及び海外監査・HKQC推進課において、当社の国内・海外拠点をはじめ、

国内グループ会社・海外現地法人に対して、主に会計・コンプライアンス・内部統制面を中心に、専任スタッフ13名（契約社員1名含む。）体制でモニタリングを行い、毎月内部監査報告を社長に直接行うとともに、経営会議にも適宜報告しております。なお、重要な事項につきましては、経営会議から取締役会へ報告しております。監査課は、監査役スタッフとしての機能も兼務し、監査役会からの要請に応じて適宜報告を行い、常に監査役と連携を図っております。また、担当取締役が年4回海外拠点の状況を取締役に報告している他、監査役会の要求に応じて適宜報告も行っております。

監査役監査につきましては、5名の監査役が不祥事の未然防止のため予防監査に重点をおき、法令順守・内部統制・リスク管理等の状況につき、対話型監査を実施するとともに、取締役会、経営会議及びその他重要な会議に同席して、経営陣の業務執行を監視・監査しております。また、監査役会は企業活動に対する見識が豊富な社外監査役の参画を得て、経営トップに対する独立性を保持しつつ、的確な業務監査を実施しており、社長並びに各部門管掌役員と適宜意見交換を行い、取締役会に対し監査役意見を表明しております。なお、当事業年度におきましては、監査役会は18回開催されました。

監査役、監査課は会計監査人とそれぞれ定期的に監査報告を行うとともに、随時情報交換を行って、相互の監査状況の把握に努め、連携してモニタリング機能の向上を図っております。

また、監査課は内部統制の整備・評価を担う内部統制・HKQC推進課と連携し、情報の共有化及び業務の効率化を図っております。

⑤ 社外取締役及び社外監査役の状況と提出会社との人的関係、資本的關係又は取引關係その他の利害關係の概要

当社は社外取締役3名と社外監査役3名を選任しており、本報告書提出日現在、当社と現任の社外取締役及び社外監査役との間には、「5 役員の状況」にて開示している事項を除き、特別な利害關係はなく、一般株主との利益相反が生じるおそれがないものと判断しております。

社外取締役の手島達也氏は、当社の取引先である東邦亜鉛㈱の代表取締役社長を平成29年6月まで務めておりましたが、当社と東邦亜鉛㈱との取引額は当社の年間連結売上高の0.2%未満であり、その規模・性質などに照らして、一般株主との利益相反が生じるおそれがないものと判断しております。なお、東邦亜鉛㈱と当社との間に特別な利害關係はありません。

社外監査役の大久保克則氏は、当社の取引先である㈱三井住友銀行の顧問を兼務しており、㈱三井住友銀行は当社の株式を3.76%保有する株主でもあります。同氏は金融機関での豊富な国際経験・知識に基づき、グローバルな視点から当社の経営を監査していただけるものと考えております。

また、社外監査役の平形光男氏は、当社の取引先である㈱日本興業銀行（現 ㈱みずほ銀行）に勤務していた経歴がありますが、同行を退職後、既に約12年が経過しており、その間、東洋建設㈱の常勤監査役、東京ベイヒルトン㈱の取締役社長として独立した活動を行っていたことなどに鑑み、一般株主との利益相反が生じるおそれがないものと判断しております。なお、東洋建設㈱及び東京ベイヒルトン㈱と当社との間に特別な利害關係はありません。

また、その他の社外取締役及び社外監査役の現在の兼職先及び過去10年の勤務先については、当社との間に特別な利害關係はありません。

当社は社外取締役及び社外監査役には株主を始めとする社外のステークホルダーの代表として、客観的な視座で当社グループの経営判断や業務執行の妥当性・適格性を評価し、見解を表明していただくことを期待しており、それにふさわしい能力及び経験等を有する方を選任しております。

選任に際しての当社からの独立性に関する判断基準としましては、平成29年9月26日開催の取締役会において、以下の「社外役員の独立性に関する判断基準」を導入しております。

・当社における社外役員の独立性に関する判断基準について

当社の社外役員（社外取締役及び社外監査役）について、以下の各号いずれの基準にも該当しない場合は、当社は当該社外役員を、独立性を有する者と判断します。

1. 当社の大株主（直近の事業年度末において、直接・間接に10%以上の議決権を保有）またはその業務執行者
2. 当社が大株主（直近の事業年度末において、直接・間接に10%以上の議決権を保有）となっている者またはその業務執行者
3. 当社の主要な取引先（直近の事業年度において、取引金額が当社の年間連結売上高の2%を超える取引先）またはその業務執行者

4. 当社の主要な借入先（直近の事業年度末の借入額が当社の連結総資産の2%を超える借入先）またはその業務執行者
5. 当社の会計監査人の代表社員または社員
6. 当社から役員報酬以外に、直近の事業年度において年間1,000万円を超える金銭その他の財産を得ているコンサルタント、弁護士、公認会計士、税理士等の専門的サービスを提供する者（当該財産を得ている者が法人、組合等の団体である場合は、当該団体に所属する者をいう。）
7. 当社から直近の事業年度において、年間1,000万円を超える寄付・助成等を受けている者（当該寄付・助成等を受けている者が法人、組合等の団体である場合は、当該団体の業務執行者）
8. 過去3年間において上記1.～7.に該当する者
9. 上記1.～8.に該当する者の近親者

（注1）業務執行者とは、業務執行取締役、執行役、執行役員及びその他の使用人等をいう。

（注2）近親者とは、二親等以内の親族をいう。

なお、基準のいずれかに該当する者であっても、当該人物が会社法上の社外取締役・社外監査役の要件を充足しており、かつ、当社の現状を鑑みて当該人物が必要な専門性や経験を有するとともに、その知見や視点が当社の経営にとって有益で、独立社外役員としてふさわしいと判断した場合には、判断の理由及び独立社外役員としての要件を充足している旨を対外的に説明することによって、当該人物を当社の独立社外役員候補者とすることができるものとします。

社外取締役及び社外監査役は、現時点においては、その活動をそれぞれ取締役会又は監査役会を通じて行っており、社外取締役・社外監査役のみでの当社の内部監査部門、会計監査人、内部統制部門と連携した活動は特段行っておりません。

また、当社は社外取締役及び社外監査役との間において、会社法第423条第1項の賠償責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく賠償責任限度額は、法令の定める額としております。

⑥ 役員報酬等の内容

イ. 提出会社の役員区分ごとの報酬等の内容

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）			対象となる 役員数 (名)
		基本報酬	賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	687	495	192	—	14
監査役 (社外監査役を除く。)	48	48	—	—	4
社外役員	42	42	—	—	5

ロ. 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載を省略しております。

ハ. 役員報酬等の額の決定に関する方針

役員報酬の限度額は株主総会決議で定められており、取締役報酬及び取締役賞与については、平成18年度より法人税法第34条第1項第1号に定める「定期同額給与」及び同第3号に定める「業績連動給与」を導入しております。

このうち「定期同額給与」については、社長を委員長とする役員評価委員会にて、各役員からのコミットメントの評価及び役員間の相互評価を受けた各役員の総合評価を行っており、役職位毎の標準報酬額に対しその評価結果を基に報酬会議にて個別報酬額案を作成、取締役会に付議し、決定しております。

また、平成29年度の「業績連動給与」の算定方法は下記のとおりであり、その算定方法については、監査役全員が適正と認めた旨を記載した書面を受領しております。

記

- a) 業務を執行する取締役に支給する業績連動給与の総額は、連結損益及び包括利益計算書における親会社株主に帰属する当期純利益金額に1.5%を乗じた額（百万円未満切捨）とし、2億50百万円を超えない金額とする。

- b) 親会社株主に帰属する当期純利益金額が30億円未満の場合は業績連動給与を支払わないものとする。
 - c) 各取締役への支給配分は役職位別とし、各役職位別の支給配分は、aで算定された業績連動給与の総額にdに定める役職位係数を乗じ、業務を執行する全取締役の係数の合計で除した金額（10万円未満切捨）とする。
 - d) 各役職位別の係数は、取締役会長1.0、取締役社長1.0、取締役副社長執行役員0.9、取締役専務執行役員0.8、取締役常務執行役員0.7、取締役執行役員0.6とする。
 - e) 各取締役に支給する額は、それぞれ取締役会長20百万円、取締役社長20百万円、取締役副社長執行役員18百万円、取締役専務執行役員16百万円、取締役常務執行役員14百万円、取締役執行役員12百万円を超えない金額とする。
 - f) 業務を執行する期間が当該事業年度の期間の2分の1に達しない取締役に業績連動給与を支給しない。
 - g) 業務執行役員でない取締役及び監査役には業績連動給与を支給しない。
- なお、平成30年度の「業績連動給与」の算定方法につきましては、下記のとおりとすることを平成30年6月22日開催の取締役会において決議し、その算定方法について監査役全員が適正と認めた旨を記載した書面を受領しております。

記

- a) 業務を執行する取締役に支給する業績連動給与の総額は、連結損益及び包括利益計算書における親会社株主に帰属する当期純利益金額に1.5%を乗じた額（百万円未満切捨）とし、2億50百万円を超えない金額とする。
- b) 親会社株主に帰属する当期純利益金額が30億円未満の場合は業績連動給与を支払わないものとする。
- c) 各取締役への支給配分は役職位別とし、各役職位別の支給配分は、aで算定された業績連動給与の総額にdに定める役職位係数を乗じ、業務を執行する全取締役の係数の合計で除した金額（10万円未満切捨）とする。
- d) 各役職位別の係数は、取締役会長1.0、取締役社長1.0、取締役副社長執行役員0.9、取締役専務執行役員0.8、取締役常務執行役員0.7、取締役執行役員0.6とする。
- e) 各取締役に支給する額は、それぞれ取締役会長20百万円、取締役社長20百万円、取締役副社長執行役員18百万円、取締役専務執行役員16百万円、取締役常務執行役員14百万円、取締役執行役員12百万円を超えない金額とする。
- f) 業務を執行する期間が当該事業年度の期間の2分の1に達しない取締役に業績連動給与を支給しない。
- g) 業務執行役員でない取締役及び監査役には業績連動給与を支給しない。

⑦ 会計監査の状況

会計監査につきましては、当社は、有限責任 あずさ監査法人と会社法監査及び金融商品取引法監査について監査契約を締結しております。当社の会計監査業務を執行した公認会計士は、以下のとおりであります。

指定有限責任社員 業務執行社員 田中基博
 指定有限責任社員 業務執行社員 堀内計尚
 指定有限責任社員 業務執行社員 竹下晋平

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士17名、その他14名であります。

また、当社は会計監査人がその期待される役割を十分に発揮できることを目的として、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議をもって同法第423条第1項の会計監査人（会計監査人であった者を含む。）の責任を法令の限度において免除することができる旨を定款で定めております。

なお、当社は有限責任 あずさ監査法人との間において、会社法第423条第1項の賠償責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく賠償責任限度額は、法令の定める額としております。

⑧ 株主総会の特別決議要件

当社は株主総会の円滑な運営を行うことを目的として、会社法第309条第2項の定めによる株主総会の特別決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款で定めております。

⑨ 株式の保有状況

イ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

銘柄数 164銘柄

貸借対照表計上額の合計額 52,815百万円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の銘柄、保有区分、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
(前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
(株)中山製鋼所	8,058,590	5,858	取引関係強化
イーレックス(株)	3,249,000	4,265	取引関係強化
新日鐵住金(株)	1,517,517	3,892	取引関係強化
大和工業(株)	1,001,520	2,876	取引関係強化
ジオスター(株)	1,511,000	1,671	取引関係強化
マブチモーター(株)	194,600	1,220	取引関係強化
NOK(株)	460,000	1,188	取引関係強化
(株)淀川製鋼所	350,600	1,058	取引関係強化
東京製鐵(株)	1,051,000	982	取引関係強化
JFEホールディングス(株)	501,840	957	取引関係強化
(株)ジーテクト	445,280	875	取引関係強化
AFARAK GROUP PLC	9,000,000	851	取引関係強化
朝日工業(株)	600,000	800	取引関係強化
三協立山(株)	420,000	697	取引関係強化
日成ビルド工業(株)	1,232,000	678	取引関係強化
日新製鋼(株)	429,940	629	取引関係強化
中部鋼板(株)	956,000	620	取引関係強化
フルサト工業(株)	344,000	580	取引関係強化
住友不動産(株)	200,000	577	取引関係強化
東邦亜鉛(株)	989,000	539	取引関係強化
共英製鋼(株)	270,000	536	取引関係強化
新家工業(株) (注)	1,775,000	386	取引関係強化
合同製鐵(株) (注)	205,900	358	取引関係強化
OM HOLDINGS LIMITED (注)	32,500,000	306	取引関係強化
アルインコ(株) (注)	316,800	305	取引関係強化
(株)神戸製鋼所 (注)	300,000	304	取引関係強化
(株)シマノ (注)	17,678	287	取引関係強化
大阪製鐵(株) (注)	136,620	275	取引関係強化
G-FACTORY(株) (注)	200,000	232	取引関係強化
古河機械金属(株) (注)	1,020,000	209	取引関係強化

(注) 貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下の銘柄であります。

(当事業年度)
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
(株)中山製鋼所	8,058,590	5,842	取引関係強化
OM HOLDINGS LIMITED	32,500,000	3,596	取引関係強化
新日鐵住金(株)	1,517,517	3,545	取引関係強化
大和工業(株)	1,001,520	2,956	取引関係強化
イーレックス(株)	3,249,000	2,693	取引関係強化
BACANORA LITHIUM PLC	12,333,261	1,688	取引関係強化
AFARAK GROUP PLC	9,000,000	1,137	取引関係強化
JFEホールディングス(株)	501,840	1,075	取引関係強化
(株)長谷工コーポレーション	650,000	1,052	取引関係強化
マブチモーター(株)	194,600	1,019	取引関係強化
(株)淀川製鋼所	350,600	1,005	取引関係強化
ジオスター(株)	1,511,000	974	取引関係強化
NOK(株)	460,000	950	取引関係強化
(株)ジーテクト	445,280	911	取引関係強化
東京製鐵(株)	1,051,000	898	取引関係強化
朝日工業(株)	600,000	787	取引関係強化
住友不動産(株)	200,000	787	取引関係強化
日成ビルド工業(株)	616,000	785	取引関係強化
中部鋼鈹(株)	956,000	761	取引関係強化
信和(株)	689,400	717	取引関係強化
三協立山(株)	420,000	667	取引関係強化
フルサト工業(株)	344,000	627	取引関係強化
日新製鋼(株)	429,940	546	取引関係強化
東邦亜鉛(株)	98,900	500	取引関係強化
共英製鋼(株)	270,000	495	取引関係強化
合同製鐵(株) (注)	205,900	438	取引関係強化
新家工業(株) (注)	177,500	373	取引関係強化
アルインコ(株) (注)	316,800	348	取引関係強化
(株)神戸製鋼所 (注)	300,000	319	取引関係強化
大阪製鐵(株) (注)	136,620	297	取引関係強化

(注) 貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下の銘柄であります。

- ハ. 保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	75	2	80	1
連結子会社	—	—	3	—
計	75	2	84	1

② 【その他重要な報酬の内容】

前連結会計年度

当社連結子会社であるHANWA AMERICAN CORP.等は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているKPMGメンバーファームに対して、監査業務への報酬として35百万円を支払っております。

当連結会計年度

当社連結子会社であるHANWA AMERICAN CORP.等は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているKPMGメンバーファームに対して、監査業務への報酬として35百万円を支払っております。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

前連結会計年度

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務である社債発行における監査人から引受事務幹事証券会社への書簡（コンフォートレター）作成についての報酬及びタイにおけるPE. TAX申告上の必要な報告書作成を目的とする当社の財務状態にかかる調査業務に対する報酬であります。

当連結会計年度

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務である社債発行における監査人から引受事務幹事証券会社への書簡（コンフォートレター）作成についての報酬及びタイにおけるPE. TAX申告上の必要な報告書作成を目的とする当社の財務状態にかかる調査業務に対する報酬であります。

④ 【監査報酬の決定方針】

監査報酬の決定方針はありませんが、監査日数、当社の規模・事業の特性等の要素を勘案して決定しております。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)及び事業年度(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)の連結財務諸表及び財務諸表について、有限責任あずさ監査法人により監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みとして、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (平成30年 3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※3 28,465	※3 36,198
受取手形及び売掛金	307,853	※7 400,317
電子記録債権	30,742	※7 25,416
有価証券	486	683
たな卸資産	※1 111,039	※1 134,877
繰延税金資産	1,919	1,891
その他	57,599	47,128
貸倒引当金	△334	△481
流動資産合計	537,773	646,032
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	※3 37,963	※3 42,089
減価償却累計額	△19,367	△21,364
建物及び構築物 (純額)	18,596	20,724
土地	※2, ※3 29,640	※2, ※3 32,402
その他	29,188	32,054
減価償却累計額	△17,932	△20,712
その他 (純額)	11,255	11,341
有形固定資産合計	59,492	64,469
無形固定資産	2,034	3,426
投資その他の資産		
投資有価証券	※3, ※4 72,524	※3, ※4 109,781
長期貸付金	10,842	20,366
繰延税金資産	283	103
その他	※4 11,787	※4 18,688
貸倒引当金	△504	△902
投資その他の資産合計	94,932	148,037
固定資産合計	156,458	215,933
資産合計	694,232	861,965

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	191,989	※7 266,595
短期借入金	※3 107,262	※3 116,245
コマーシャル・ペーパー	5,000	10,000
1年内償還予定の社債	※3 21	10,121
未払法人税等	6,752	5,050
賞与引当金	2,306	2,474
製品保証引当金	146	391
関係会社事業損失引当金	512	-
その他	45,068	40,851
流動負債合計	359,058	451,730
固定負債		
社債	※3 40,076	40,055
長期借入金	※3 106,232	※3 147,601
繰延税金負債	5,366	6,142
再評価に係る繰延税金負債	※2 1,634	※2 1,633
退職給付に係る負債	4,518	4,943
その他	5,709	6,157
固定負債合計	163,536	206,534
負債合計	522,595	658,264
純資産の部		
株主資本		
資本金	45,651	45,651
利益剰余金	117,778	131,045
自己株式	△3,720	△3,726
株主資本合計	159,709	172,969
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	12,580	14,342
繰延ヘッジ損益	142	△169
土地再評価差額金	※2 2,966	※2 2,963
為替換算調整勘定	1,062	3,110
退職給付に係る調整累計額	△6,037	△5,388
その他の包括利益累計額合計	10,713	14,858
非支配株主持分	1,214	15,872
純資産合計	171,637	203,700
負債純資産合計	694,232	861,965

②【連結損益及び包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月 31日)
売上高	1,514,037	1,791,118
売上原価	※1 1,449,522	※1 1,718,922
売上総利益	64,514	72,195
販売費及び一般管理費	※2 41,088	※2 45,977
営業利益	23,426	26,217
営業外収益		
受取利息	1,238	1,747
受取配当金	1,446	1,127
為替差益	-	316
その他	1,207	1,339
営業外収益合計	3,891	4,531
営業外費用		
支払利息	2,553	3,245
持分法による投資損失	88	127
為替差損	284	-
支払保証料	734	613
支払手数料	167	648
その他	582	611
営業外費用合計	4,411	5,246
経常利益	22,907	25,502
特別利益		
固定資産売却益	※3 876	-
投資有価証券売却益	674	165
関係会社事業損失引当金戻入額	-	※4 512
特別利益合計	1,551	678
特別損失		
固定資産売却損	※5 227	-
投資有価証券評価損	814	181
出資金評価損	-	217
事業整理損	※6 253	-
製品保証引当金繰入額	-	※7 345
特別損失合計	1,295	744
税金等調整前当期純利益	23,163	25,435
法人税、住民税及び事業税	7,354	8,410
法人税等調整額	△625	△95
法人税等合計	6,728	8,315
当期純利益	16,434	17,120
(内訳)		
親会社株主に帰属する当期純利益	16,363	17,354
非支配株主に帰属する当期純利益又は非支配株主に帰属する当期純損失(△)	71	△233

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	4,555	1,762
繰延ヘッジ損益	518	△311
為替換算調整勘定	△723	316
退職給付に係る調整額	360	587
持分法適用会社に対する持分相当額	△154	3,057
その他の包括利益合計	※8 4,557	※8 5,411
包括利益	20,991	22,532
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	21,017	21,501
非支配株主に係る包括利益	△26	1,031

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					その他の包括利益 累計額
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評 価差額金
当期首残高	45,651	4	104,600	△1,449	148,807	8,024
当期変動額						
剰余金の配当			△3,900		△3,900	
連結範囲の変動			219		219	
持分法の適用範囲の 変動			700		700	
土地再評価差額金の 取崩			—		—	
親会社株主に帰属す る当期純利益			16,363		16,363	
自己株式の取得				△2,270	△2,270	
連結子会社株式の取 得による持分の増減		△4	△200		△205	
連結子会社株式の売 却による持分の増減			△0		△0	
その他			△4		△4	
株主資本以外の項目 の当期変動額（純 額）						4,555
当期変動額合計	—	△4	13,177	△2,270	10,902	4,555
当期末残高	45,651	—	117,778	△3,720	159,709	12,580

	その他の包括利益累計額					非支配株主 持分	純資産合計
	繰延ヘッジ 損益	土地再評価差 額金	為替換算 調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	△376	2,966	1,842	△6,397	6,059	1,272	156,139
当期変動額							
剰余金の配当							△3,900
連結範囲の変動							219
持分法の適用範囲の 変動							700
土地再評価差額金の 取崩							—
親会社株主に帰属す る当期純利益							16,363
自己株式の取得							△2,270
連結子会社株式の取 得による持分の増減							△205
連結子会社株式の売 却による持分の増減							△0
その他							△4
株主資本以外の項目 の当期変動額（純 額）	518	—	△780	360	4,654	△58	4,596
当期変動額合計	518	—	△780	360	4,654	△58	15,498
当期末残高	142	2,966	1,062	△6,037	10,713	1,214	171,637

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					その他の包括利益 累計額
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評 価差額金
当期首残高	45,651	—	117,778	△3,720	159,709	12,580
当期変動額						
剰余金の配当			△4,063		△4,063	
連結範囲の変動			△25		△25	
持分法の適用範囲の 変動			—		—	
土地再評価差額金の 取崩			2		2	
親会社株主に帰属す る当期純利益			17,354		17,354	
自己株式の取得				△6	△6	
連結子会社株式の取 得による持分の増減		—	—		—	
連結子会社株式の売 却による持分の増減			—		—	
その他			—		—	
株主資本以外の項目 の当期変動額(純 額)						1,762
当期変動額合計	—	—	13,266	△6	13,260	1,762
当期末残高	45,651	—	131,045	△3,726	172,969	14,342

	その他の包括利益累計額					非支配株主 持分	純資産合計
	繰延ヘッジ 損益	土地再評価差 額金	為替換算 調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	142	2,966	1,062	△6,037	10,713	1,214	171,637
当期変動額							
剰余金の配当							△4,063
連結範囲の変動							△25
持分法の適用範囲の 変動							—
土地再評価差額金の 取崩							2
親会社株主に帰属す る当期純利益							17,354
自己株式の取得							△6
連結子会社株式の取 得による持分の増減							—
連結子会社株式の売 却による持分の増減							—
その他							—
株主資本以外の項目 の当期変動額(純 額)	△311	△2	2,047	648	4,144	14,658	18,803
当期変動額合計	△311	△2	2,047	648	4,144	14,658	32,063
当期末残高	△169	2,963	3,110	△5,388	14,858	15,872	203,700

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	23,163	25,435
減価償却費	3,971	4,240
のれん償却額	217	532
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	67	△193
受取利息及び受取配当金	△2,684	△2,875
支払利息	2,553	3,245
持分法による投資損益 (△は益)	88	127
固定資産売却益	△876	-
投資有価証券売却益	△674	△165
関係会社事業損失引当金戻入額	-	△512
固定資産売却損	227	-
投資有価証券評価損	814	181
出資金評価損	-	217
事業整理損	253	-
製品保証引当金繰入額	-	345
売上債権の増減額 (△は増加)	△60,931	△82,227
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△3,991	△21,619
仕入債務の増減額 (△は減少)	39,538	69,366
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	959	992
その他	44	△7,073
小計	2,739	△9,982
利息及び配当金の受取額	2,766	3,681
利息の支払額	△2,562	△3,257
法人税等の支払額又は還付額 (△は支払)	1,015	△10,196
営業活動によるキャッシュ・フロー	3,959	△19,755
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△1,245	△3,039
定期預金の払戻による収入	1,261	3,553
有形固定資産の取得による支出	△3,656	△4,650
有形固定資産の売却による収入	1,453	144
投資有価証券の取得による支出	△2,883	△35,461
投資有価証券の売却及び償還による収入	1,161	1,137
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入	-	※2 1,176
短期貸付金の純増減額 (△は増加)	△14,829	11,665
長期貸付けによる支出	△808	△15,037
長期貸付金の回収による収入	28	978
その他	1,090	△436
投資活動によるキャッシュ・フロー	△18,427	△39,971

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月 31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	12,343	12,185
コマーシャル・ペーパーの純増減額 (△は減少)	5,000	5,000
長期借入れによる収入	15,340	84,237
長期借入金の返済による支出	△10,460	△53,860
社債の発行による収入	9,950	9,951
社債の償還による支出	△10,039	△503
非支配株主からの払込みによる収入	-	13,580
自己株式の取得による支出	△2,270	△6
配当金の支払額	△3,899	△4,063
非支配株主への配当金の支払額	△29	△28
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	△220	-
その他	△267	△58
財務活動によるキャッシュ・フロー	15,447	66,435
現金及び現金同等物に係る換算差額	△370	△203
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	609	6,504
現金及び現金同等物の期首残高	25,804	27,206
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	791	1,144
現金及び現金同等物の期末残高	※1 27,206	※1 34,855

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 37社

連結子会社名は「第1 企業の概況」の「4 関係会社の状況」に記載しております。

なお、日興金属(株)、西部サービス(株)及び(有)アルファフォルムについては、連結財務諸表に与える影響が重要になったため、亀井鐵鋼(株)、山陽鋼材(株)及びジャパンライフ(株)については、新たに株式を取得したため、また、日本南ア・クロム(株)については、新規設立のため、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。

(2) 主要な非連結子会社の名称等

(株)カネキ

(株)松岡鋼材

廣内圧延工業(株)

HANWA STEEL SERVICE MEXICANA, S.A. DE C.V.

日鴻不銹鋼(上海)有限公司

連結の範囲から除いた理由

非連結子会社は、その総資産額、売上高、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等の観点から、いずれも小規模であり、かつ、全体としても連結財務諸表に重要な影響を与えないと認められるので、連結の範囲から除外しております。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用非連結子会社の数 4社

持分法適用非連結子会社の名称等 阪和商貿(北京)有限公司

阪和商貿(大連)有限公司

阪和商貿(青島)有限公司

(株)阪和アルファビジネス

(2) 持分法適用関連会社の数 4社

持分法適用関連会社の名称等 近江産業(株)

COSMOSTEEL HOLDINGS LTD.

SMC TRADING INVESTMENT JSC

SAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD.

なお、近江産業(株)、SMC TRADING INVESTMENT JSC及びSAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD.については、株式を追加取得したため、当連結会計年度から持分法適用の範囲に含めております。

(3) 持分法を適用しない主要な非連結子会社及び関連会社の名称等

持分法を適用していない非連結子会社(HANWA MEXICANA, S.A. DE C.V. 他)及び関連会社(東莞鉄和金属制品有限公司他)は、それぞれ当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等の観点から、いずれも小規模であり、かつ、全体としても連結財務諸表に重要な影響を与えないと認められるので、持分法は適用していません。

(4) 持分法の適用の手続きについて特に記載する必要があると認められる事項

持分法を適用している会社のうち、決算日が異なる会社については、主に当該会社の事業年度に係る財務諸表を使用しております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、決算日が連結決算日と異なる会社及びその決算日は次のとおりであります。

連結子会社名	決算日
HANWA AMERICAN CORP.	2月末日
HANWA CANADA CORP.	2月末日
阪和(香港)有限公司	2月末日
台湾阪和興業股份有限公司	2月末日

HANWA SINGAPORE (PRIVATE) LTD.	2月末日
PT. HANWA INDONESIA	2月末日
SEATTLE SHRIMP & SEAFOOD COMPANY, INC.	12月末日
阪和(上海)管理有限公司	12月末日
HANWA THAILAND CO., LTD.	12月末日
長富不銹鋼中心(蘇州)有限公司	12月末日
阪和鋼板加工(東莞)有限公司	12月末日
HANWA STEEL SERVICE (THAILAND) CO., LTD.	12月末日
PT. HANWA STEEL SERVICE INDONESIA	12月末日

連結財務諸表の作成に当たっては、連結子会社の同日現在の財務諸表を使用しておりますが、連結決算日との間に生じた重要な取引については連結上必要な調整を行っております。

なお、平成29年4月に子会社化した亀井鐵鋼(株)は、当連結会計年度より決算日を12月31日から3月31日に変更しております。この決算期変更に伴い、当連結会計年度において、亀井鐵鋼(株)の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの12ヵ月間を連結しております。

4 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価基準(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

評価基準…原価基準

評価方法…移動平均法

② デリバティブ取引により生じる正味の債権及び債務

評価基準…時価基準

③ たな卸資産

評価基準…原価基準(連結貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

評価方法…主として移動平均法又は個別法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産(リース資産を除く。)

主として定額法

② 無形固定資産(リース資産を除く。)

定額法

なお、ソフトウェア(自社利用分)については、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法

③ リース資産

a 所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法

b 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

定額法

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員賞与に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

- ③ 関係会社事業損失引当金
関係会社に対する将来の損失に備えるため、当社グループが負担することとなる損失見込額に基づき計上しております。
- ④ 製品保証引当金
販売済製品に係る一定期間の無償補修費の支出に備えるため、過去の実績率に基づき計上しております。また、一部の子会社で個別に発生額を見積もることができる費用については、その見積額を計上しております。
- (4) 退職給付に係る会計処理の方法
- ① 退職給付見込額の期間帰属方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。
- ② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法
過去勤務費用については、主にその発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数による定額法により按分した額を費用処理しております。
数理計算上の差異については、主に各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理することとしております。
- ③ 小規模企業等における簡便法の採用
一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額等を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。
- (5) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算基準
外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。
なお、在外子会社等の資産及び負債は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めております。
- (6) 重要なヘッジ会計の方法
- ① ヘッジ会計の方法
繰延ヘッジ処理によっております。
ただし、特例処理の要件を満たしている金利スワップ取引については、特例処理によっております。
なお、一部の在外連結子会社については、国際会計基準による時価ヘッジ処理によっております。
- ② ヘッジ手段とヘッジ対象
当連結会計年度にヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりであります。
- a ヘッジ手段…金利スワップ取引
ヘッジ対象…借入金
- b ヘッジ手段…商品先渡取引
ヘッジ対象…ニッケル等の輸入によるたな卸資産及び予定取引
- ③ ヘッジ方針
デリバティブ取引に関する権限規程及び取引限度額等を定めた内部規程に基づき、ヘッジ対象に係る商品価格変動リスク及び金利変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。
- ④ ヘッジ有効性の評価方法
ヘッジ対象のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動を比較し、両者の変動額等を基礎にして、ヘッジ有効性を評価しております。ただし、特例処理によっている金利スワップ取引については、有効性の評価を省略しております。
- (7) のれんの償却方法及び償却期間
5年間の定額法により償却しております。
- (8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
手許現金、要求払預金及び取得日から3ヶ月以内に満期日の到来する流動性の高い、容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない短期的な投資からなっております。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

① 消費税等の処理方法

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

② 連結納税制度の適用

連結納税制度を適用しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

平成34年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

在外連結子会社

平成30年3月31日までに公表されている主な会計基準等の新設または改訂について、適用していないものは下記のとおりであります。

なお、当該会計基準等の適用による影響額は、評価中であります。

会計基準等の名称	概要	適用予定日
「金融商品」(IFRS第9号)	金融商品の分類及び測定、減損並びにヘッジ会計について新たな要求事項を導入	平成31年3月期より適用予定
「顧客との契約から生じる収益」(IFRS第15号)	顧客との契約から生じる収益の会計処理において企業が使用する単一の包括的なモデルを導入	平成31年3月期より適用予定

(表示方法の変更)

(連結損益及び包括利益計算書関係)

前連結会計年度において、「営業外費用」の「その他」に含めていた「支払手数料」は、営業外費用の総額の100分の10を超えたため、当連結会計年度より独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益及び包括利益計算書において、「営業外費用」の「その他」に表示していた750百万円は、「支払手数料」167百万円、「その他」582百万円として組み替えております。

(連結貸借対照表関係)

※1 たな卸資産の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
商品及び製品	101,650百万円	124,289百万円
仕掛品	1,917	1,559
原材料及び貯蔵品	7,471	9,028
計	111,039	134,877

※2 土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、平成14年3月31日に当社の事業用の土地の再評価を行い、再評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第1号に定める方法により算出しております。

再評価を行った年月日

平成14年3月31日

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
再評価を行った土地の連結会計年度末における時価と再評価後の帳簿価額との差額	953百万円	741百万円

※3 担保資産

借入金の担保に供している資産

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
現金及び預金	50百万円	—百万円
建物及び構築物	280	432
土地	1,112	2,726
計	1,442	3,158
対応債務 短期借入金	247	327
1年内償還予定の社債	21	—
社債	76	—
長期借入金	587	267
計	932	594

取引保証金として差入れている資産

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
現金及び預金	13百万円	43百万円
投資有価証券	5,298	5,604
計	5,311	5,647

第三者の借入等に供している資産

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券	1,705百万円	1,594百万円

※4 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券(株式)	13,737百万円	53,911百万円
投資有価証券(社債)	—	250
投資その他の資産のその他(出資金)	1,714	2,699

5 保証債務

連結会社以外の会社の銀行借入等に対し保証を行っております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
HANWA (MALAYSIA) SDN. BHD.	21百万円	1,545百万円
SAN DIEGO VISTA STEEL SERVICE CORP.	504	903
日鴻不銹鋼(上海)有限公司	—	482
PT. HANWA ROYAL METALS	448	318
SOHBI CRAFT POLAND SP. ZO. O.	108	281
阪和鋼板加工(江西)有限公司	243	243
HANWA MEXICANA, S. A. DE C. V.	26	233
その他	721	850
計	2,076	4,859

6 受取手形(輸出手形含む)割引高、電子記録債権割引高及び受取手形裏書譲渡高

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
受取手形(輸出手形含む)割引高	6,071百万円	9,864百万円
電子記録債権割引高	—	79
受取手形裏書譲渡高	194	233

※7 期末日満期手形及び電子記録債権の会計処理については、満期日に決済が行われたものとして処理しております。なお、当連結会計年度末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形及び電子記録債権を満期日に決済が行われたものとして処理しております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
受取手形	—百万円	4,390百万円
電子記録債権	—	2,600
支払手形	—	7,974

(連結損益及び包括利益計算書関係)

- ※1 たな卸資産の収益性の低下に基づく簿価切下額（前期に計上した簿価切下額の戻入額を相殺した額）は次のとおりであります（△は戻入額）。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上原価	△655百万円	139百万円

- ※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
従業員給料	13,847百万円	15,271百万円
賞与引当金繰入額	2,178	2,339
退職給付費用	2,001	2,032
貸倒引当金繰入額	53	146

- ※3 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
土地	869百万円	—百万円
その他	7	—
計	876	—

- ※4 関係会社事業損失引当金戻入額

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

関係会社事業損失引当金戻入額は、連結子会社において負担することを想定していた関係会社の債務保証等の費用が見込まれなくなったため、当該引当金を取り崩したものであります。

- ※5 固定資産売却損の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物及び構築物	227百万円	—百万円

- ※6 事業整理損

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

事業整理損は、連結子会社における一部事業所の閉鎖に伴う損失であり、その内訳は次のとおりであります。

減損損失	111百万円
設備撤去等費用見積額	109
固定資産処分損	20
その他	11
計	253

なお、減損損失の内容は次のとおりであります。

場所	事業所又は用途	減損損失		
		建物及び構築物 (百万円)	その他 (百万円)	計 (百万円)
千葉県袖ヶ浦市	袖ヶ浦ヤード	111	0	111
	計	111	0	111

(注)減損損失の「その他」は「機械及び装置」であります。

当社及び連結子会社は主として各事業所をグルーピングの単位としており、遊休資産については個別資産ごとにグルーピングを行っております。

上記資産は遊休資産となり、今後の使用見込みがなくなったため、資産の帳簿価額を備忘価額まで減額しております。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

該当事項はありません。

※7 製品保証引当金繰入額

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

製品保証引当金繰入額は、連結子会社における製品保証に伴う費用の支出に備えるため、当該費用を個別に見積もって計上したものであります。

※8 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	7,542百万円	2,220百万円
組替調整額	△663	190
税効果調整前	6,879	2,411
税効果額	2,324	648
その他有価証券評価差額金	4,555	1,762
繰延ヘッジ損益		
当期発生額	△286	△465
組替調整額	1,036	22
税効果調整前	749	△443
税効果額	231	△131
繰延ヘッジ損益	518	△311
為替換算調整勘定		
当期発生額	△723	316
組替調整額	—	—
税効果調整前	△723	316
税効果額	—	—
為替換算調整勘定	△723	316
退職給付に係る調整額		
当期発生額	△602	△225
組替調整額	1,125	1,076
税効果調整前	523	850
税効果額	162	263
退職給付に係る調整額	360	587
持分法適用会社に対する持分相当額		
当期発生額	△154	3,057
その他の包括利益合計	4,557	5,411

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	211,663,200	—	—	211,663,200

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	4,455,897	4,008,576	—	8,464,473

(変動事由の概要)

「増加」の主な要因は、平成28年5月13日開催の取締役会決議に基づき、自己株式4,000,000株を取得したことによります。

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成28年6月29日 定時株主総会	普通株式	2,072	10.00	平成28年3月31日	平成28年6月30日
平成28年11月11日 取締役会	普通株式	1,828	9.00	平成28年9月30日	平成28年12月6日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	2,031	10.00	平成29年3月31日	平成29年6月30日

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	211,663,200	—	169,330,560	42,332,640

(変動事由の概要)

「減少」は、平成29年10月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行ったことによるものであります。

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	8,464,473	4,181	6,774,279	1,694,375

(変動事由の概要)

「増加」の主な要因は、単元未満株主の買取請求に応じたことによるものであります。

「減少」は、平成29年10月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行ったことによるものであります。

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	2,031	10.00	平成29年3月31日	平成29年6月30日
平成29年11月10日 取締役会	普通株式	2,031	10.00	平成29年9月30日	平成29年12月5日

(注)平成29年10月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っております。「1株当たり配当額」につきましては、当該株式併合前の金額を記載しております。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成30年6月22日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	3,047	75.00	平成30年3月31日	平成30年6月25日

(注)「1株当たり配当額」には、創立70周年記念配当10.00円が含まれております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
現金及び預金勘定	28,465百万円	36,198百万円
投資その他の資産の「その他」に 含まれる長期性預金	—	17
預入期間が3ヶ月を超える 定期預金	△1,259	△1,360
現金及び現金同等物	27,206	34,855

※2 株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

株式の取得により亀井鐵鋼(株)、山陽鋼材(株)及びジャパンプライフ(株)を新たに連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得価額と取得による収入との関係は次のとおりであります。

流動資産	11,218百万円
固定資産	3,044
のれん	1,808
流動負債	△6,842
固定負債	△7,442
非支配株主持分	△46
株式の取得価額	1,739
現金及び現金同等物	△2,915
差引：連結の範囲の変更を伴う子会社株式 の取得による収入	1,176

3 重要な非資金取引の内容

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

当連結会計年度に増加した投資有価証券のうち、3,682百万円は長期貸付金の転換権行使により取得したものであります。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

該当事項はありません。

(リース取引関係)

オペレーティング・リース取引

(借主側)

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
1年内	529百万円	551百万円
1年超	7,834	7,458
計	8,364	8,009

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、鉄鋼を中心に金属原料、非鉄金属、食品、石油・化成品、木材及び機械等各種商品の販売を主たる事業とし、さらに鋼材加工、非鉄金属加工及びアミューズメント施設の管理・運営等の事業活動を行っております。これらの営業取引及び投融資活動等に必要な資金は、主として銀行借入により調達しておりますが、安定的・機動的な流動性確保のため、資金調達手段の多様化を図り、資本市場における社債並びにコマーシャル・ペーパー発行による調達も行っております。一時的な余資は、安全性の高い金融資産で運用しております。

デリバティブ取引については、為替や金利、商品価格の変動によるリスクを軽減するために行っており、投機目的の取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

受取手形、売掛金及び電子記録債権は、取引先の信用リスクを有しております。このうち、外貨建てのものについては、為替変動リスクも有しております。

有価証券及び投資有価証券は、主に取引先を中心とした株式であり、価格変動リスクを有しております。また、外貨建てのものについては、為替変動リスクも有しております。

長期貸付金は、主に取引先に対するもので、信用リスクを有しております。

支払手形及び買掛金のうち、外貨建てのものについては、為替変動リスクを有しております。

短期借入金、コマーシャル・ペーパー、社債及び長期借入金は、運転資金及び投融資資金の調達を目的としておりますが、金融市場動向などの調達環境の変化による流動性リスクを有しております。また、このうち一部については、金利変動リスクや為替変動リスクを有しております。

デリバティブ取引は、外貨建ての債権債務にかかる為替変動リスクをヘッジすることを目的とした先物為替予約取引（通貨スワップ取引を含む。）、借入金の一部について金利変動リスクをヘッジすることを目的とした金利スワップ取引、商品相場の価格変動リスクをヘッジすることを目的とした商品先渡及び商品スワップ取引であり、市場リスクに加え取引先の信用リスクを有しております。

なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、前述の「会計方針に関する事項」に記載されている「重要なヘッジ会計の方法」をご覧ください。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

受取手形、売掛金及び電子記録債権、並びに長期貸付金の信用リスクに関しては、「与信管理規程」に従い、取引先ごとに与信限度額設定及び残高管理を行っており、定期的にその信用状況をモニタリングしております。また、受取手形、売掛金及び電子記録債権、支払手形及び買掛金の為替変動リスクについては、デリバティブ取引を利用してリスクの軽減に努めております。

有価証券及び投資有価証券の価格変動リスクは、主に取引先を中心とした株式であり、定期的に時価や取引先企業の財務状況等を把握し、適宜取締役会へ報告しております。また、為替変動リスクについては、デリバティブ取引を利用してリスクの軽減に努めております。

なお、事業投資等については、「新規事業及び投融資に係る審査・決裁規程」に従い、所定の手続きを経た上で実行の是非を決定しており、実行後も発行体の財務状態や取引状況等を継続的に把握し、保有方針を見直しております。

短期借入金、コマーシャル・ペーパー、社債及び長期借入金の資金調達に係る流動性リスクに関しては、当社グループの資金需要見通しに応じた資金調達計画を作成し、金融市場動向なども勘案して、資金調達手段の多様化を図り手元流動性の確保に努めております。また、金利変動リスク及び為替変動リスクのあるものについては、デリバティブ取引などを利用してリスクの軽減に努めております。

通貨関連及び商品関連の各デリバティブ取引の実行及び管理は、「営業部門業務規程」等に従い、部門毎に統轄役員承認を受けて実施しております。また、「職務権限規程」及びその細則において、取引権限及び取引限度額等が明示されております。

なお、借入金等に伴う金利関連のデリバティブ取引については、管理部門統轄役員承認を受けて実施しております。

また、デリバティブ取引先の信用リスクを軽減するため、格付の高い金融機関等とのみ取引を行っております。

商品関連のデリバティブ取引の契約残高については、デリバティブ取引を行う部門が各部門の統轄役員及び監査部に報告するとともに、業務管理室が契約先からの残高確認書と照合を行い、統轄役員及び監査部に報告しております。また、経理部が契約先に対して直接残高確認を行っており、監査部が必要に応じ取引内容の調査を行って

ります。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

また、「デリバティブ取引関係」注記におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2 金融商品の時価等に関する事項

前連結会計年度(平成29年3月31日)

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません((注2)参照)。

	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	28,465	28,465	—
(2) 受取手形及び売掛金	307,853		
貸倒引当金(※1)	△267		
	307,586	307,586	—
(3) 電子記録債権	30,742		
貸倒引当金(※1)	△29		
	30,712	30,712	—
(4) 有価証券及び投資有価証券			
① 関連会社株式	2,671	1,051	△1,619
② その他有価証券	38,621	38,621	—
(5) 長期貸付金	10,842		
貸倒引当金(※1)	△10		
	10,831	10,831	—
資産計	418,888	417,268	△1,619
(1) 支払手形及び買掛金	191,989	191,989	—
(2) 短期借入金	68,882	68,882	—
(3) コマーシャル・ペーパー	5,000	5,000	—
(4) 1年内償還予定の社債	21	21	—
(5) 社債	40,076	40,264	△188
(6) 長期借入金(1年内返済予定含む。)	144,612	144,702	△90
負債計	450,582	450,860	△278
デリバティブ取引(※2)			
① ヘッジ会計が適用されていないもの	(※3) 10,444	(※3) 10,444	—
② ヘッジ会計が適用されているもの	(49)	(640)	△591
デリバティブ取引計	10,395	9,803	△591

(※1) 一般貸倒引当金を控除しております。

(※2) デリバティブ取引によって生じた正味の債権債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で示しております。

(※3) 契約に基づき取引先等に評価損益が帰属するデリバティブ取引11,188百万円が含まれております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金、並びに(3) 電子記録債権

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(4) 有価証券及び投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記をご参照ください。

(5) 長期貸付金

長期貸付金は、主として金利の見直しが行われる変動金利型であるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

負 債

(1) 支払手形及び買掛金、(2) 短期借入金、並びに(3) コマーシャル・ペーパー

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(4) 1年内償還予定の社債、並びに(5) 社債

社債の時価は、市場価格のあるものについては、日本証券業協会が提示する価格を使用し、市場価格のないものについては、短期間で償還されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(6) 長期借入金(1年内返済予定含む。)

長期借入金の時価は、元利金の合計額を新規に同様の借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。変動金利型の長期借入金については、短期間で市場金利を反映していることから、時価は帳簿価額にほぼ等しいため、当該帳簿価額によっております。なお、長期借入金には1年内返済予定の借入金を含んでおります。

デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記をご参照ください。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)
(1) 子会社株式及び関連会社株式	11,066
計	11,066
(2) その他有価証券	
① 非上場株式	4,190
② 非上場外国株式	14,049
③ 非上場外国転換社債	2,406
④ 投資事業有限責任組合への出資	5
計	20,651

上記については、市場価格がなく、かつ、将来キャッシュ・フローを見積もることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(4) 有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度において、子会社株式及び関連会社株式について757百万円、その他有価証券について57百万円の減損処理を行っております。

(注3) 金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	28,465	—	—	—
受取手形及び売掛金	307,853	—	—	—
電子記録債権	30,742	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
其他有価証券のうち満期があるもの (非上場外国転換社債等)	486	1,924	—	—
長期貸付金	—	8,559	1,438	2
計	367,548	10,484	1,438	2

長期貸付金841百万円については、償還予定時期が確定していないため、上表に含めておりません。

(注4) 短期借入金、コマーシャル・ペーパー、社債及び長期借入金の連結決算日後の返済予定額

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	68,882	—	—	—	—	—
コマーシャル・ペーパー	5,000	—	—	—	—	—
社債	21	10,021	10,021	10,021	10,013	—
長期借入金	38,380	43,858	27,089	11,279	9,939	14,066
計	112,283	53,879	37,110	21,300	19,952	14,066

当連結会計年度(平成30年3月31日)

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません((注2)参照)。

	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	36,198	36,198	—
(2) 受取手形及び売掛金	400,317		
貸倒引当金(※1)	△363		
	399,953	399,953	—
(3) 電子記録債権	25,416		
貸倒引当金(※1)	△23		
	25,392	25,392	—
(4) 有価証券及び投資有価証券			
① 関連会社株式	3,712	1,892	△1,819
② その他有価証券	43,813	43,813	—
(5) 長期貸付金	20,366		
貸倒引当金(※1)	△20		
	20,345	20,345	—
資産計	529,417	527,597	△1,819
(1) 支払手形及び買掛金	266,595	266,595	—
(2) 短期借入金	81,722	81,722	—
(3) コマーシャル・ペーパー	10,000	10,000	—
(4) 1年内償還予定の社債	10,121	10,121	—
(5) 社債	40,055	40,152	△97
(6) 長期借入金(1年内返済予定含む。)	182,124	182,063	60
負債計	590,619	590,655	△36
デリバティブ取引(※2)			
① ヘッジ会計が適用されていないもの	(※3) (5,722)	(※3) (5,722)	—
② ヘッジ会計が適用されているもの	(460)	(867)	△407
デリバティブ取引計	(6,182)	(6,589)	△407

(※1) 一般貸倒引当金を控除しております。

(※2) デリバティブ取引によって生じた正味の債権債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で示しております。

(※3) 契約に基づき取引先等に評価損益が帰属するデリバティブ取引(9,185)百万円が含まれております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金、並びに(3) 電子記録債権

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(4) 有価証券及び投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記をご参照ください。

(5) 長期貸付金

長期貸付金は、主として金利の見直しが行われる変動金利型であるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

負債

(1) 支払手形及び買掛金、(2) 短期借入金、並びに(3) コマーシャル・ペーパー

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(4) 1年内償還予定の社債、並びに(5) 社債

社債の時価は、市場価格のあるものについては、日本証券業協会が提示する価格を使用し、市場価格のないものについては、短期間で償還されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(6) 長期借入金(1年内返済予定含む。)

長期借入金の時価は、元利金の合計額を新規に同様の借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。変動金利型の長期借入金については、短期間で市場金利を反映していることから、時価は帳簿価額にほぼ等しいため、当該帳簿価額によっております。なお、長期借入金には1年内返済予定の借入金を含んでおります。

デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記をご参照ください。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)
(1) 子会社株式及び関連会社株式	50,198
計	50,198
(2) その他有価証券	
① 非上場株式	4,307
② 非上場外国株式	6,333
③ 非上場外国転換社債	1,822
④ 非上場国内転換社債	26
⑤ 非上場国内社債	250
計	12,740

上記については、市場価格がなく、かつ、将来キャッシュ・フローを見積もることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(4) 有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。当連結会計年度において、子会社株式及び関連会社株式について60百万円、その他有価証券について120百万円の減損処理を行っております。

(注3) 金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	36,198	—	—	—
受取手形及び売掛金	400,317	—	—	—
電子記録債権	25,416	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの (非上場外国転換社債等)	683	1,396	26	—
長期貸付金	—	18,169	1,388	11
計	462,616	19,566	1,414	11

長期貸付金796百万円については、償還予定時期が確定していないため、上表に含めておりません。

(注4) 短期借入金、コマーシャル・ペーパー、社債及び長期借入金の連結決算日後の返済予定額

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	81,722	—	—	—	—	—
コマーシャル・ペーパー	10,000	—	—	—	—	—
社債	10,121	10,021	10,021	10,013	10,000	—
長期借入金	34,522	27,474	27,134	30,446	30,941	31,605
計	136,366	37,495	37,155	40,459	40,941	31,605

(有価証券関係)

前連結会計年度

1 その他有価証券(平成29年3月31日)

	種類	連結決算日における 連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	33,861	12,812	21,049
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	4,759	6,883	△2,123
計		38,621	19,695	18,925

(注) 1 表中の「取得原価」は減損処理後の帳簿価額であります。

2 表中には、その他有価証券で時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません。

2 当連結会計年度中に売却したその他有価証券(自平成28年4月1日至平成29年3月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	1,160	674	—
計	1,160	674	—

3 減損処理を行った有価証券(自平成28年4月1日至平成29年3月31日)

当連結会計年度において、有価証券について814百万円(子会社株式及び関連会社株式について757百万円、その他有価証券の株式57百万円)減損処理を行っております。

当連結会計年度

1 その他有価証券(平成30年3月31日)

	種類	連結決算日における 連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	38,906	15,470	23,436
	債券	—	—	—
	小計	38,906	15,470	23,436
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	4,899	7,361	△2,461
	債券	7	10	△2
	小計	4,907	7,371	△2,464
合計		43,813	22,842	20,971

(注) 1 表中の「取得原価」は減損処理後の帳簿価額であります。

2 表中には、その他有価証券で時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません。

2 当連結会計年度中に売却したその他有価証券(自平成29年4月1日至平成30年3月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	304	114	3
計	304	114	3

3 減損処理を行った有価証券(自平成29年4月1日至平成30年3月31日)

当連結会計年度において、有価証券について181百万円(子会社株式及び関連会社株式について60百万円、その他有価証券の株式120百万円)減損処理を行っております。

(デリバティブ取引関係)

前連結会計年度(平成29年3月31日)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1) 通貨関連

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	為替予約取引				
	売建				
	米ドル	71,334	—	△347	△347
	その他の通貨	787	—	△1	△1
	買建				
	米ドル	7,416	—	37	37
	その他の通貨	1,010	—	△4	△4
	スワップ取引				
	受取円・支払米ドル	12,088	—	△311	△311
	計	—	—	—	△627

(注) 時価の算定方法

取引金融機関から提示された価格によっております。

(2) 商品関連

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	先渡取引				
	石油製品				
	売建	3,229	—	67	67
	買建	2,360	—	30	30
	非鉄地金				
	売建	7,877	—	△192	△192
	買建	4,105	—	△36	△36
	スワップ取引				
	石油製品				
受取固定・支払変動	139	—	△2	△2	
受取変動・支払固定	1,106	—	17	17	
計		—	—	—	△117

(注) 1 時価の算定方法

取引所会員等から提示された価格によっております。

- 2 上記のほか、下記のとおり契約に基づき取引先等に評価損益が帰属するデリバティブ取引があります。
 なお、当該取引は、「金融商品関係」注記のデリバティブ取引の①ヘッジ会計が適用されていないものを含めております。

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	先渡取引				
	非鉄地金				
	売建	112,676	—	11,660	11,660
	買建	23,336	—	△471	△471
計		—	—	—	11,188

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 金利関連

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金	40,336	35,736	△591

(注) 時価の算定方法

取引金融機関から提示された価格によっております。

(2) 商品関連

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
繰延ヘッジ処理	先渡取引				
	非鉄地金 売建	ニッケル等の輸入 によるたな卸資産 及び予定取引	87,880	—	132
	買建		50,928	254	△181

(注) 時価の算定方法

取引所会員から提示された価格によっております。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1) 通貨関連

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	為替予約取引				
	売建				
	米ドル	100,694	—	2,791	2,791
	その他の通貨	533	—	△1	△1
	買建				
	米ドル	15,621	—	△202	△202
	その他の通貨	2,679	26	△42	△42
	スワップ取引				
	受取円・支払米ドル	12,364	—	603	603
	計	—	—	—	3,149

(注) 時価の算定方法

取引金融機関から提示された価格によっております。

(2) 商品関連

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	先渡取引				
	石油製品				
	売建	2,538	—	△24	△24
	買建	1,882	—	79	79
	非鉄地金				
	売建	6,907	—	407	407
	買建	3,513	—	△143	△143
	スワップ取引				
	石油製品				
受取固定・支払変動	62	—	△0	△0	
受取変動・支払固定	513	—	△4	△4	
計		—	—	—	313

(注) 1 時価の算定方法

取引所会員等から提示された価格によっております。

- 2 上記のほか、下記のとおり契約に基づき取引先等に評価損益が帰属するデリバティブ取引があります。
 なお、当該取引は、「金融商品関係」注記のデリバティブ取引の①ヘッジ会計が適用されていないものを含めております。

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	先渡取引				
	非鉄地金				
	売建	112,025	—	△9,193	△9,193
	買建	13,020	—	8	8
計		—	—	—	△9,185

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 金利関連

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金	40,626	35,171	△407

(注) 時価の算定方法

取引金融機関から提示された価格によっております。

(2) 商品関連

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
繰延ヘッジ処理	先渡取引				
	非鉄地金 売建	ニッケル等の輸入 によるたな卸資産 及び予定取引	32,549	—	△147
	買建		22,066	170	△312

(注) 時価の算定方法

取引所会員から提示された価格によっております。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、積立型、非積立型の確定給付制度及び確定拠出制度を採用しております。また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。

当社の確定給付企業年金制度では、給与と勤務期間に基づいて給付原資の金額を決定し、一時金又は年金を支給しております。年金の支給は、市場金利の動向に基づき年金換算率の変動する20年保証期間付きの終身年金制度を採用しております。

一部の連結子会社が有する確定給付企業年金制度及び退職一時金制度では、主に簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

なお、一部の連結子会社が加入していた大阪鉄商厚生年金基金は、平成29年3月31日付で厚生労働大臣の認可を得て解散し、新たに後継制度として設立された大阪鉄商企業年金基金へ平成29年4月1日付で移行しております。複数事業主制度については、自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができないため、確定拠出制度と同様に会計処理しております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表（簡便法を適用した制度を除く。）

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	退職給付債務の期首残高	25,687百万円
勤務費用	1,149	1,215
利息費用	96	100
数理計算上の差異の発生額	277	△111
退職給付の支払額	△785	△861
その他	12	2
退職給付債務の期末残高	26,438	26,786

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表（簡便法を適用した制度を除く。）

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
年金資産の期首残高	22,099百万円	22,423百万円
期待運用収益	662	674
数理計算上の差異の発生額	△320	△345
事業主からの拠出額	767	806
退職給付の支払額	△785	△861
その他	—	3
年金資産の期末残高	22,423	22,700

(3) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	487百万円	502百万円
退職給付費用	104	149
退職給付の支払額	△62	△49
制度への拠出額	△20	△22
その他	△5	277
退職給付に係る負債の期末残高	502	857

(4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	26,680百万円	27,077百万円
年金資産	△22,627	△22,906
	4,052	4,171
非積立型制度の退職給付債務	465	772
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	4,518	4,943
退職給付に係る負債	4,518	4,943
退職給付に係る資産	—	—
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	4,518	4,943

(注) 簡便法を適用した制度を含んでおります。

(5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
勤務費用	1,149百万円	1,215百万円
利息費用	96	100
期待運用収益	△662	△674
数理計算上の差異の費用処理額	1,056	1,019
過去勤務費用の費用処理額	65	65
簡便法で計算した退職給付費用	104	149
割増退職金	3	5
その他	△8	△18
確定給付制度に係る退職給付費用	1,803	1,864

(6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
過去勤務費用	65百万円	65百万円
数理計算上の差異	457	785
合計	523	850

(7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
未認識過去勤務費用	130百万円	65百万円
未認識数理計算上の差異	8,574	7,789
合計	8,705	7,854

(8) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
債券(注1)	27.6%	34.0%
株式(注1)	16.5	16.9
現金及び預金	4.6	0.6
一般勘定	24.0	22.2
その他(注2)	27.3	26.3
合計	100.0	100.0

(注) 1 伝統的資産及びデリバティブ等をヘッジ目的で利用する運用商品であります。

2 伝統的資産以外の資産クラスや各種先物・デリバティブ等を投資対象とする運用商品への投資であります。

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(9) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
割引率	0.4%	0.4%
長期期待運用収益率	3.0	3.0
予想昇給率	3.4	3.4

3 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度(確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の年金基金制度を含む。)への要拠出額は、前連結会計年度239百万円、当連結会計年度251百万円であります。

なお、要拠出額を退職給付費用として処理している複数事業主制度に関する事項について、前連結会計年度につきましては、一部の連結子会社が加入していた全国鐵構工業厚生年金基金及び大阪鉄商厚生年金基金は、それぞれ平成29年3月21日及び平成29年3月31日付で厚生労働大臣の認可を得て解散済みであることから、記載を省略しております。また、当連結会計年度につきましては、一部の連結子会社が加入している大阪鉄商企業年金基金は平成29年4月1日付で設立し、直近時点で金額が確定していないため、記載を省略しております。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
連結子会社との合併に伴う将来 減算一時差異	2,731百万円	2,731百万円
投資有価証券評価損否認額	1,890	1,861
退職給付に係る負債	1,345	1,493
土地買戻損失否認額	1,293	1,293
税務上の繰越欠損金	1,076	1,292
減損損失否認額	795	795
賞与引当金	705	761
土地再評価差額金	225	225
その他	3,807	4,026
繰延税金資産小計	13,873	14,482
評価性引当額	△8,840	△10,131
繰延税金資産合計	5,032	4,351
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	5,692	6,342
土地再評価差額金	1,634	1,633
その他	2,502	2,156
繰延税金負債合計	9,830	10,132
繰延税金負債の純額	4,797	5,781

(注) 繰延税金負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
流動資産－繰延税金資産	1,919百万円	1,891百万円
固定資産－繰延税金資産	283	103
流動負債－その他(繰延税金負債)	0	0
固定負債－繰延税金負債	5,366	6,142
再評価に係る 繰延税金負債	1,634	1,633

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率	30.9%	30.9%
(調整)		
交際費等永久に損金に 算入されない項目	1.1	1.1
受取配当金等永久に益金に 算入されない項目	△0.4	△0.3
住民税均等割等	0.3	0.2
評価性引当金の増減額	△2.3	1.0
法人税額の特別控除	△0.9	△1.2
のれん償却額	0.3	0.7
持分法適用に係る連結調整項目	0.2	1.5
在外連結子会社の留保利益に 係る納税見込額	0.3	0.7
税率相違による影響額	△0.5	△0.9
その他	0.1	△1.0
税効果会計適用後の法人税等の負担率	29.1	32.7

(企業結合等関係)

共通支配下の取引等

子会社の第三者割当増資

(1) 取引の概要

① 結合当事企業の名称及びその事業の内容

結合当事企業の名称：日本南ア・クロム株式会社（当社の連結子会社）

事業の内容：投資事業（金属鉱業を営む会社の株式及び出資持分等を保有する事による事業活動の支配並びに管理）

② 企業結合日

平成29年4月1日（みなし取得日）

③ 企業結合の法的形式

第三者割当増資

④ 結合後企業の名称

変更ありません。

⑤ その他取引の概要に関する事項

当社は、SAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD. が生産するフェロクロムの日本向け供給権獲得のための同社株式取得を目的として、平成29年4月3日に、当社100%子会社の日本南ア・クロム株式会社を設立しております。この度の増資は、当該子会社が、SAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD. 株式取得に係る対価の支払いと、円滑な事業運営に必要な資金の確保を目的として実施したものであります。当社がこの度の増資引受を行ったことにより、当社の所有割合は100%から50.1%となっております。

(2) 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」に基づき、共通支配下の取引として処理しております。

(3) 子会社株式の追加取得に関する事項

取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	13,635百万円
取得原価		13,635百万円

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当社グループ（当社及び連結子会社）の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、鉄鋼を中心とした各種の商品売買を主たる事業とし、主に取扱商品またはサービスの内容別の営業部門によって事業活動を行っております。

したがって、当社グループは、営業部門を基礎とした事業セグメントから構成されており、「鉄鋼事業」、「金属原料事業」、「非鉄金属事業」、「食品事業」、「石油・化成品事業」及び「海外販売子会社」の6つを報告セグメントとしております。

各報告セグメントに属する主な取扱商品またはサービスの内容は、以下の通りであります。

鉄鋼事業	：	条鋼、建設工事、鋼板、特殊鋼、線材、鋼管、鉄屑・（加工、保管）
金属原料事業	：	ニッケル、クロム、シリコン、マンガン、合金鉄
非鉄金属事業	：	アルミニウム、銅、亜鉛・（リサイクル事業）
食品事業	：	水産物、畜産物
石油・化成品事業	：	石油製品、工業薬品、化学品、廃棄物燃料
海外販売子会社	：	（各種商品の売買及びそれらに係る事業活動）

（注）当社グループにおけるサービスの内容は、（ ）で示しております。

2 報告セグメントごとの売上高、利益、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、連結損益及び包括利益計算書の経常利益と調整を行っております。セグメント間の取引価格及び振替価格の決定方法については、市場価格に基づいております。

3 報告セグメントごとの売上高、利益、資産その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

	報告セグメント						
	鉄鋼事業 (百万円)	金属原料 事業 (百万円)	非鉄金属 事業 (百万円)	食品事業 (百万円)	石油・ 化成品事業 (百万円)	海外販売 子会社 (百万円)	計 (百万円)
売上高							
外部顧客への 売上高	775,725	131,413	77,674	88,671	257,165	111,993	1,442,643
セグメント間の 内部売上高又は 振替高	11,167	3,210	1,532	339	7,299	62,287	85,837
計	786,892	134,624	79,206	89,011	264,465	174,280	1,528,481
セグメント利益	18,082	1,413	1,084	2,872	2,461	196	26,111
セグメント資産	371,789	114,436	21,772	34,074	41,128	32,305	615,506
その他の項目							
減価償却費	2,970	121	267	41	42	50	3,494
のれんの償却額	140	33	44	—	—	—	217
受取利息	190	790	0	32	50	73	1,138
支払利息	2,008	1,171	180	324	276	298	4,260
持分法投資利益又は 損失(△)	△66	—	—	—	—	△120	△186
持分法適用会社 への投資額	2,671	—	—	—	—	48	2,719
有形固定資産及び 無形固定資産の 増加額	3,479	69	310	58	36	84	4,038

	その他 (百万円) (注)1	合計 (百万円)	調整額 (百万円) (注)2	連結財務諸表 計上額 (百万円)
売上高				
外部顧客への 売上高	71,394	1,514,037	—	1,514,037
セグメント間の 内部売上高又は 振替高	1,660	87,498	△87,498	—
計	73,054	1,601,535	△87,498	1,514,037
セグメント利益	1,526	27,638	△4,731	22,907
セグメント資産	27,394	642,900	51,332	694,232
その他の項目				
減価償却費	362	3,857	114	3,971
のれんの償却額	—	217	—	217
受取利息	10	1,148	90	1,238
支払利息	167	4,427	△1,874	2,553
持分法投資利益又は 損失(△)	97	△88	—	△88
持分法適用会社 への投資額	778	3,498	—	3,498
有形固定資産及び 無形固定資産の 増加額	345	4,383	51	4,435

- (注) 1 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、木材事業及び機械事業等を含んでおります。
- 2 調整額の内容は次のとおりであります。
- (1)セグメント利益の調整額△4,731百万円は、セグメント間取引消去、各事業セグメントに配分していない全社費用が含まれております。全社費用は主に管理部門に係る一般管理費及び収益であります。
 - (2)セグメント資産の調整額51,332百万円は、各事業セグメントに配分していない全社資産であり、主に余資運用資金（現金及び預金）、長期投資資金（投資有価証券）及び管理部門に係る資産であります。
 - (3)減価償却費の調整額114百万円は、主に全社資産に係る減価償却費であります。
 - (4)受取利息及び支払利息の調整額（純額）1,964百万円は、セグメント間取引消去、各事業セグメントに配分していない費用及び収益であります。
 - (5)有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額51百万円は、全社資産の増加額であります。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

	報告セグメント						
	鉄鋼事業 (百万円)	金属原料 事業 (百万円)	非鉄金属 事業 (百万円)	食品事業 (百万円)	石油・ 化成製品事業 (百万円)	海外販売 子会社 (百万円)	計 (百万円)
売上高							
外部顧客への 売上高	920,269	198,330	97,356	98,876	233,926	167,388	1,716,148
セグメント間の 内部売上高又は 振替高	11,678	4,869	1,704	601	6,768	54,289	79,912
計	931,948	203,200	99,060	99,477	240,695	221,678	1,796,060
セグメント利益	20,324	4,958	2,038	1,057	2,164	950	31,494
セグメント資産	411,990	215,003	23,545	41,945	47,925	35,956	776,367
その他の項目							
減価償却費	3,197	98	240	33	211	62	3,842
のれんの償却額	326	56	67	—	82	—	532
受取利息	182	1,227	5	20	52	110	1,599
支払利息	2,358	2,607	270	391	253	685	6,568
持分法投資利益又は 損失(△)	242	△513	—	—	—	15	△255
持分法適用会社 への投資額	4,023	38,125	—	—	—	107	42,257
有形固定資産及び 無形固定資産の 増加額	4,803	47	127	11	99	48	5,137

	その他 (百万円) (注) 1	合計 (百万円)	調整額 (百万円) (注) 2	連結財務諸表 計上額 (百万円)
売上高				
外部顧客への 売上高	74,970	1,791,118	—	1,791,118
セグメント間の 内部売上高又は 振替高	1,628	81,541	△81,541	—
計	76,598	1,872,659	△81,541	1,791,118
セグメント利益	691	32,185	△6,683	25,502
セグメント資産	29,978	806,345	55,620	861,965
その他の項目				
減価償却費	304	4,147	93	4,240
のれんの償却額	—	532	—	532
受取利息	10	1,610	137	1,747
支払利息	204	6,772	△ 3,527	3,245
持分法投資利益又は 損失(△)	127	△127	—	△127
持分法適用会社 への投資額	905	43,162	—	43,162
有形固定資産及び 無形固定資産の 増加額	760	5,898	42	5,941

- (注) 1 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、木材事業及び機械事業等を含んでおります。
- 2 調整額の内容は次のとおりであります。
- (1)セグメント利益の調整額△6,683百万円は、セグメント間取引消去、各事業セグメントに配分していない全社費用が含まれております。全社費用は主に管理部門に係る一般管理費及び収益であります。
 - (2)セグメント資産の調整額55,620百万円は、各事業セグメントに配分していない全社資産であり、主に余資運用資金（現金及び預金）、長期投資資金（投資有価証券）及び管理部門に係る資産であります。
 - (3)減価償却費の調整額93百万円は、主に全社資産に係る減価償却費であります。
 - (4)受取利息及び支払利息の調整額（純額）3,665百万円は、セグメント間取引消去、各事業セグメントに配分していない費用及び収益であります。
 - (5)有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額42百万円は、全社資産の増加額であります。

【関連情報】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

	鉄鋼 (百万円)	金属原料 (百万円)	非鉄金属 (百万円)	食品 (百万円)	石油・ 化成品 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)
外部顧客への売上高	806,203	139,846	116,981	88,768	279,812	82,425	1,514,037

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

日本 (百万円)	アジア (百万円)	その他の地域 (百万円)	合計 (百万円)
1,136,629	300,439	76,969	1,514,037

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

日本 (百万円)	アジア (百万円)	その他の地域 (百万円)	合計 (百万円)
53,140	6,251	100	59,492

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益及び包括利益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

	鉄鋼 (百万円)	金属原料 (百万円)	非鉄金属 (百万円)	食品 (百万円)	石油・ 化成品 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)
外部顧客への売上高	987,386	169,309	155,056	100,178	284,363	94,823	1,791,118

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

日本 (百万円)	アジア (百万円)	その他の地域 (百万円)	合計 (百万円)
1,302,944	386,262	101,911	1,791,118

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益及び包括利益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

当連結会計年度において、金属原料事業に係る減損損失111百万円が発生しており、連結損益及び包括利益計算書上、事業整理損に含めて計上しております。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

	報告セグメント							その他 (百万円)	全社・ 消去 (百万円)	合計 (百万円)
	鉄鋼事業 (百万円)	金属原料 事業 (百万円)	非鉄金属 事業 (百万円)	食品事業 (百万円)	石油・ 化成品事業 (百万円)	海外販売 子会社 (百万円)	計 (百万円)			
当期末残高	148	66	110	—	—	—	325	—	—	325

(注) のれんの償却額に関しては、セグメント情報に同様の情報を展開しているため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

	報告セグメント							その他 (百万円)	全社・ 消去 (百万円)	合計 (百万円)
	鉄鋼事業 (百万円)	金属原料 事業 (百万円)	非鉄金属 事業 (百万円)	食品事業 (百万円)	石油・ 化成品事業 (百万円)	海外販売 子会社 (百万円)	計 (百万円)			
当期末残高	1,629	90	123	—	219	—	2,063	—	—	2,063

(注) のれんの償却額に関しては、セグメント情報に同様の情報を展開しているため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及びその近親者が議決権の過半数を所有している会社(当該会社等の子会社も含む)	(株)ナカジョウ (注)1	新潟県 三条市	30	鋼材の加工 及び販売	—	営業上の取引	鋼材の販売 (注)2	10 (注)3	—	—

(注) 1 当社執行役員竹迫 隆一の近親者が議決権の100%を直接保有しております。

2 取引条件及びその決定方針については双方協議のうえ決定しております。

3 取引金額に消費税等は含まれておりません。

2. 重要な関連会社に関する注記

当連結会計年度において、重要な関連会社はSAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD. であり、その要約財務情報は以下のとおりであります。なお、当連結会計年度の要約財務情報は平成29年4月1日から平成29年12月31日までの期間に係るものであります。

(単位：百万円)

	SAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD.	
	前連結会計年度	当連結会計年度
流動資産合計	—	59,799
固定資産合計	—	78,604
流動負債合計	—	32,211
固定負債合計	—	53,242
純資産合計	—	52,949
売上高	—	100,010
税引前当期純利益	—	5,357
当期純利益	—	3,927

(注) SAMANCOR CHROME HOLDINGS PROPRIETARY LTD. は、当連結会計年度より持分法適用関連会社となっております。

なお、当連結会計年度における当該持分法適用関連会社の持分法適用対象となる損益計算書の期間は平成29年4月1日から平成29年12月31日であります。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額	4,193.50円	4,621.96円
1株当たり当期純利益	400.89円	427.04円

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2 平成29年10月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益を算定しております。
3 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	16,363	17,354
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(百万円)	16,363	17,354
普通株式の期中平均株式数(株)	40,818,129	40,639,020

- (注) 平成29年10月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、普通株式の期中平均株式数を算定しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
阪和興業(株)	第24回無担保社債	平成25年 6月14日	10,000	10,000 (10,000)	0.74	無担保社債	平成30年 6月14日
阪和興業(株)	第26回無担保社債	平成26年 9月22日	10,000	10,000	0.44	無担保社債	平成31年 9月20日
阪和興業(株)	第27回無担保社債	平成27年 9月18日	10,000	10,000	0.43	無担保社債	平成32年 9月18日
阪和興業(株)	第28回無担保社債	平成28年 10月28日	10,000	10,000	0.29	無担保社債	平成33年 10月28日
阪和興業(株)	第29回無担保社債	平成29年 6月9日	—	10,000	0.27	無担保社債	平成34年 6月9日
正起金属加工(株)	第10回無担保変動 利付社債	平成26年 7月31日	97	76 (21)	(注) 2	無担保社債	平成33年 7月30日
亀井鐵鋼(株)	第1回無担保社債	平成28年 3月31日	—	100 (100)	0.19	無担保社債	平成31年 3月29日
合計	—	—	40,097	50,176 (10,121)	—	—	—

(注) 1 「当期末残高」の(内書)は、1年内償還予定の金額であります。

2 第10回無担保変動利付社債の利率は6ヶ月円TIBORの変動利率であります。

3 連結決算日後5年内における1年ごとの償還予定額の総額は以下のとおりであります。

1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
10,121	10,021	10,021	10,013	10,000

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	68,882	81,722	1.4	—
1年以内に返済予定の長期借入金	38,380	34,522	0.5	—
1年以内に返済予定のリース債務	348	488	—	—
長期借入金(1年以内に返済予定 のものを除く。)	106,232	147,601	0.5	平成31年4月～ 平成43年6月
リース債務(1年以内に返済予定 のものを除く。)	729	1,049	—	平成31年4月～ 平成40年1月
その他有利子負債 コマーシャル・ペーパー (1年以内)	5,000	10,000	△0.0	—
合計	219,573	275,385	—	—

(注) 1 金利水準は通貨により異なりますが、「平均利率」については、借入通貨の相違を考慮せず、借入金等の当期末残高に対する加重平均利率を記載しております。なお、リース債務については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額で連結貸借対照表に計上しているため、「平均利率」の記載を省略しております。

- 2 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年内における1年ごとの返済予定額の総額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	27,474	27,134	30,446	30,941
リース債務	364	258	165	109

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	408,378	836,979	1,306,566	1,791,118
税金等調整前四半期(当期)純利益 (百万円)	6,820	12,782	17,688	25,435
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益 (百万円)	4,433	8,154	11,750	17,354
1株当たり四半期(当期)純利益金額 (円)	109.10	200.66	289.14	427.04

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額 (円)	109.10	91.56	88.48	137.90

(注) 平成29年10月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っております。当連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり四半期(当期)純利益金額を算定しております。

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年 3月31日)	当事業年度 (平成30年 3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	15,384	23,066
受取手形	※6 42,827	※5, ※6 30,235
電子記録債権	29,813	※5, ※6 24,040
売掛金	※6 239,435	※6 333,659
有価証券	486	683
たな卸資産	※1 82,043	※1 94,710
前渡金	18,814	15,513
前払費用	366	276
繰延税金資産	1,480	1,402
その他	※6 44,709	※6 41,771
貸倒引当金	△344	△447
流動資産合計	475,018	564,913
固定資産		
有形固定資産		
建物	11,472	12,678
構築物	1,297	1,573
機械及び装置	1,560	1,748
車両運搬具	0	1
工具、器具及び備品	321	365
土地	19,724	19,701
リース資産	186	145
建設仮勘定	1,160	3
有形固定資産合計	35,723	36,216
無形固定資産		
ソフトウェア	842	504
その他	18	18
無形固定資産合計	860	522
投資その他の資産		
投資有価証券	※2 57,587	※2 54,230
関係会社株式	37,494	66,752
出資金	3,786	3,892
関係会社出資金	3,648	4,525
長期貸付金	10,226	18,806
従業員に対する長期貸付金	49	41
関係会社長期貸付金	560	2,586
破産更生債権等	143	212
長期前払費用	244	310
前払年金費用	4,724	3,798
その他	2,809	8,986
貸倒引当金	△164	△205
投資その他の資産合計	121,109	163,938
固定資産合計	157,693	200,677
資産合計	632,711	765,590

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年 3月31日)	当事業年度 (平成30年 3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	※6 32,196	※5,※6 34,038
買掛金	※6 155,042	※6 222,563
短期借入金	68,732	67,700
コマーシャル・ペーパー	5,000	10,000
1年内償還予定の社債	-	10,000
リース債務	108	74
未払金	※6 10,635	※6 1,091
未払費用	※6 1,334	※6 1,609
未払法人税等	6,266	4,121
前受金	22,604	18,800
預り金	※6 5,179	※6 7,487
前受収益	66	80
賞与引当金	1,844	1,921
製品保証引当金	146	45
その他	876	9,563
流動負債合計	310,034	389,097
固定負債		
社債	40,000	40,000
長期借入金	103,591	144,810
リース債務	172	133
関係会社事業損失引当金	-	919
繰延税金負債	6,978	6,796
再評価に係る繰延税金負債	1,634	1,633
その他	4,538	4,549
固定負債合計	156,915	198,843
負債合計	466,949	587,940
純資産の部		
株主資本		
資本金	45,651	45,651
資本剰余金		
その他資本剰余金	4	4
資本剰余金合計	4	4
利益剰余金		
利益準備金	3,649	4,055
その他利益剰余金		
特別償却準備金	156	112
圧縮記帳積立金	50	50
繰越利益剰余金	104,551	114,673
利益剰余金合計	108,408	118,892
自己株式	△3,720	△3,726
株主資本合計	150,343	160,821
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	12,312	14,003
繰延ヘッジ損益	139	△138
土地再評価差額金	2,966	2,963
評価・換算差額等合計	15,417	16,828
純資産合計	165,761	177,650
負債純資産合計	632,711	765,590

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月 31日)	当事業年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月 31日)
売上高	※1 1,283,953	※1 1,490,680
売上原価	※1,※2 1,235,790	※1,※2 1,439,769
売上総利益	48,163	50,911
販売費及び一般管理費	※1,※3 28,494	※1,※3 30,130
営業利益	19,668	20,780
営業外収益		
受取利息	※1 1,276	※1 1,727
受取配当金	2,039	2,840
その他	※1 760	※1 912
営業外収益合計	4,075	5,479
営業外費用		
支払利息	※1 2,034	※1 2,237
為替差損	40	260
支払保証料	※1 625	※1 579
支払手数料	164	634
その他	※1 477	※1 507
営業外費用合計	3,342	4,218
経常利益	20,401	22,041
特別利益		
固定資産売却益	※4 876	-
投資有価証券売却益	674	-
特別利益合計	1,550	-
特別損失		
固定資産売却損	※5 227	-
投資有価証券評価損	-	105
関係会社株式評価損	743	-
関係会社出資金評価損	-	217
関係会社事業損失引当金繰入額	-	※6 919
特別損失合計	970	1,242
税引前当期純利益	20,982	20,799
法人税、住民税及び事業税	6,210	6,770
法人税等調整額	△890	△517
法人税等合計	5,320	6,253
当期純利益	15,661	14,545

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							利益剰余金 合計
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金			
		その他資本 剰余金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金			
				特別償却 準備金	圧縮記帳 積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	45,651	4	4	3,259	201	50	93,140	96,651
当期変動額								
剰余金の配当				390			△4,291	△3,900
特別償却準備金の取崩					△44		44	—
土地再評価差額金の取崩							—	—
当期純利益							15,661	15,661
自己株式の取得								
その他							△4	△4
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)								
当期変動額合計	—	—	—	390	△44	—	11,411	11,756
当期末残高	45,651	4	4	3,649	156	50	104,551	108,408

	株主資本		評価・換算差額等				純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△1,449	140,857	7,899	△376	2,966	10,489	151,347
当期変動額							
剰余金の配当		△3,900					△3,900
特別償却準備金の取崩		—					—
土地再評価差額金の取崩		—					—
当期純利益		15,661					15,661
自己株式の取得	△2,270	△2,270					△2,270
その他		△4					△4
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)			4,412	516	—	4,928	4,928
当期変動額合計	△2,270	9,485	4,412	516	—	4,928	14,414
当期末残高	△3,720	150,343	12,312	139	2,966	15,417	165,761

当事業年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金		利益剰余金				利益剰余金 合計
		その他資本 剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益剰余金			
				特別償却 準備金	圧縮記帳 積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	45,651	4	4	3,649	156	50	104,551	108,408
当期変動額								
剰余金の配当				406			△4,470	△4,063
特別償却準備金の取崩					△44		44	—
土地再評価差額金の取崩							2	2
当期純利益							14,545	14,545
自己株式の取得								
その他							—	—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	—	406	△44	—	10,121	10,483
当期末残高	45,651	4	4	4,055	112	50	114,673	118,892

	株主資本		評価・換算差額等				純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△3,720	150,343	12,312	139	2,966	15,417	165,761
当期変動額							
剰余金の配当		△4,063					△4,063
特別償却準備金の取崩		—					—
土地再評価差額金の取崩		2					2
当期純利益		14,545					14,545
自己株式の取得	△6	△6					△6
その他		—					—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			1,691	△278	△2	1,410	1,410
当期変動額合計	△6	10,477	1,691	△278	△2	1,410	11,888
当期末残高	△3,726	160,821	14,003	△138	2,963	16,828	177,650

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券

子会社株式及び関連会社株式

評価基準…原価基準

評価方法…移動平均法

その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価基準

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

評価基準…原価基準

評価方法…移動平均法

(2) デリバティブ取引により生じる正味の債権及び債務

評価基準…時価基準

(3) たな卸資産

評価基準…原価基準

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

評価方法…移動平均法又は個別法

2 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産 (リース資産を除く。)

主として定額法

(2) 無形固定資産 (リース資産を除く。)

定額法

なお、ソフトウェア (自社利用分) については、社内における利用可能期間 (5年) に基づく定額法

(3) リース資産

① 所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法

② 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

定額法

3 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員賞与に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(3) 製品保証引当金

販売済製品に係る一定期間の無償補修費の支出に備えるため、過去の実績率に基づき計上しております。

(4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。退職給付引当金及び退職給付費用の処理方法は以下のとおりです。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（14年）による定額法により按分した額を費用処理しております。

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（14年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理することとしております。

なお、年金資産が退職給付債務から未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用を控除した金額を超過しているため、当該超過額は、「前払年金費用」として固定資産に計上しております。

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(5) 関係会社事業損失引当金

関係会社に対する将来の損失に備えるため、当社が負担することとなる損失見込額に基づき計上しております。

4 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

5 ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。

ただし、特例処理の要件を満たしている金利スワップ取引については、特例処理によっております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

当事業年度にヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりであります。

① ヘッジ手段 … 金利スワップ取引

ヘッジ対象 … 借入金

② ヘッジ手段 … 商品先渡取引

ヘッジ対象 … ニッケル等の輸入によるたな卸資産及び予定取引

(3) ヘッジ方針

デリバティブ取引に関する権限規程及び取引限度額等を定めた内部規程に基づき、ヘッジ対象に係る商品価格変動リスク及び金利変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。

(4) ヘッジ有効性の評価方法

ヘッジ対象のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動を比較し、両者の変動額等を基礎にして、ヘッジ有効性を評価しております。ただし、特例処理によっている金利スワップ取引については、有効性の評価を省略しております。

6 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 消費税等の処理方法

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(2) 連結納税制度の適用

連結納税制度を適用しております。

(表示方法の変更)

(損益計算書関係)

前事業年度において、「営業外費用」の「その他」に含めていた「支払手数料」（前事業年度164百万円）は、金額的重要性が増したため、当事業年度より独立掲記することとしております。

(貸借対照表関係)

※1 たな卸資産の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
商品及び製品	82,033百万円	94,700百万円
貯蔵品	10	9
計	82,043	94,710

※2 担保資産

取引保証金として差入れている資産

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券	4,657百万円	5,022百万円

第三者の借入等に供している資産

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券	1,705百万円	1,594百万円

3 保証債務

次の取引先の銀行借入等に対し保証を行っております。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
HANWA SINGAPORE (PRIVATE) LTD.	8,924百万円	14,654百万円
HANWA AMERICAN CORP.	8,702	13,944
阪和鋼板加工(東莞)有限公司	3,246	3,709
トーヨーエナジー(株)	1,941	2,001
PT. HANWA INDONESIA	2,081	1,692
その他	4,398	7,325
計	29,293	43,328

4 受取手形(輸出手形含む)割引高

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
	5,918百万円	9,714百万円

※5 期末日満期手形及び電子記録債権の会計処理については、満期日に決済が行われたものとして処理しております。なお、当事業年度末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形及び電子記録債権を満期日に決済が行われたものとして処理しております。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
受取手形	—百万円	2,935百万円
電子記録債権	—	2,413
支払手形	—	7,183

※6 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
短期金銭債権	45,364百万円	56,563百万円
長期金銭債権	—	—
短期金銭債務	16,191	21,063
長期金銭債務	—	—

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高	93,817百万円	121,880百万円
仕入高	81,090	77,419
その他の営業取引高	1,302	1,281
営業取引以外の取引高	987	919

※2 売上原価には、貿易取引に係る輸出手形割引料及び輸入ユーザンス金利を含んでおります。

※3 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
従業員給料	8,733百万円	9,113百万円
賞与引当金繰入額	1,844	1,921
貸倒引当金繰入額	68	144
減価償却費	1,064	1,070
おおよその割合		
販売費	74%	74%
一般管理費	26	26

※4 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
機械及び装置	7百万円	一百万円
土地	869	—
計	876	—

※5 固定資産売却損の内容は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物	8百万円	一百万円
構築物	218	—
計	227	—

※6 関係会社事業損失引当金繰入額

前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

当事業年度における関係会社事業損失引当金繰入額は、関係会社に対する将来の損失に備えるため、損失見積額を計上しております。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度(平成29年3月31日)

区分	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
関連会社株式	825	1,051	225
計	825	1,051	225

当事業年度(平成30年3月31日)

区分	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
関連会社株式	1,520	1,892	371
計	1,520	1,892	371

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額

区分	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
子会社株式	35,812百万円	54,246百万円
関連会社株式	855	10,984
計	36,668	65,231

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「関連会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
関係会社株式及び関係会社 出資金評価損否認額	2,862百万円	2,995百万円
連結子会社との合併に伴う 将来減算一時差異	2,731	2,731
土地買戻損失否認額	1,293	1,293
減損損失否認額	795	795
賞与引当金	569	588
投資有価証券及び出資金 評価損否認額	546	537
土地再評価差額金	225	225
その他	2,716	2,099
繰延税金資産小計	11,742	11,268
評価性引当額	△8,878	△8,900
繰延税金資産合計	2,864	2,367
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	5,593	6,128
土地再評価差額金	1,634	1,633
前払年金費用	1,450	1,162
その他	1,318	469
繰延税金負債合計	9,996	9,394
繰延税金負債の純額	7,132	7,027

(注) 繰延税金負債の純額は、貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
流動資産－繰延税金資産	1,480百万円	1,402百万円
固定資産－繰延税金資産	—	—
流動負債－繰延税金負債	—	—
固定負債－繰延税金負債	6,978	6,796
再評価に係る 繰延税金負債	1,634	1,633

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率	30.9%	—%
(調整)		
交際費等永久に損金に 算入されない項目	1.2	—
受取配当金等永久に益金に 算入されない項目	△1.3	—
住民税均等割	0.2	—
法人税額の特別控除	△0.7	—
評価性引当金の増減額	△5.1	—
その他	0.2	—
税効果会計適用後の法人税等の負担率	25.4	—

(注) 当事業年度は、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(企業結合等関係)

共通支配下の取引等

連結財務諸表の「注記事項（企業結合等関係）」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④ 【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

区分	資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	減価償却 累計額 (百万円)
有形固定資産	建物	11,472	2,021	12	802	12,678	10,475
	構築物	1,297	451	6	169	1,573	1,829
	機械及び装置	1,560	441	0	253	1,748	1,492
	車両運搬具	0	2	—	1	1	4
	工具、器具 及び備品	321	198	28	126	365	579
	土地	19,724 (4,600)	—	23	—	19,701 (4,597)	—
	リース資産	186	34	—	75	145	172
	建設仮勘定	1,160	3	1,160	—	3	—
	計	35,723	3,152	1,231	1,427	36,216	14,554
無形固定資産	ソフトウェア	—	—	—	141	504	—
	その他	—	—	—	0	18	—
	計	—	—	—	142	522	—

(注) 1 「当期増加額」のうち主なものは、次のとおりであります。

北関東スチールセンター

建物	1,230百万円
構築物	253百万円
機械及び装置	265百万円

2 「当期減少額」のうち主なものは、次のとおりであります。

北関東スチールセンター

建設仮勘定	682百万円
-------	--------

3 土地の「当期首残高」、「当期末残高」の(内書)は、土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)により行った事業用土地の再評価実施前の帳簿価額との差額であります。

4 無形固定資産の金額は、重要性が乏しいと認められるので、「当期首残高」、「当期増加額」及び「当期減少額」の記載を省略しております。

【引当金明細表】

科目	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	508	507	363	652
賞与引当金	1,844	1,921	1,844	1,921
製品保証引当金	146	3	104	45
関係会社事業損失引当金	—	919	—	919

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の 買取り・買増し 取扱場所	(特別口座) 大阪市中央区北浜四丁目5番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	—
買取・買増手数料	無料
公告掲載方法	当会社の公告方法は、電子公告としております。但し、事故その他のやむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載することとしております。 なお、電子公告は当社ホームページに掲載することとしており、そのアドレスは次のとおりであります。 http://www.hanwa.co.jp/
株主に対する特典	なし

(注) 1 当会社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使できない。

- ① 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
 - ② 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
 - ③ 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
 - ④ 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡す旨を当会社に請求する権利
- 2 平成29年6月29日開催の第70回定時株主総会において、株式併合に係る議案が承認可決され、定款の一部が変更されました。これにより、株式併合の効力発生日（平成29年10月1日）をもって、単元株式数が1,000株から100株に変更となっております。

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から当報告書の提出日までの間において提出した「金融商品取引法第25条第1項」に掲げる書類は次のとおりであります。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類	事業年度 (第70期)	自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日	平成29年6月30日 関東財務局長に提出。
(2) 有価証券報告書の確認書	事業年度 (第70期)	自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日	平成29年6月30日 関東財務局長に提出。
(3) 内部統制報告書及びその添付書類	事業年度 (第70期)	自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日	平成29年6月30日 関東財務局長に提出。
(4) 四半期報告書及び確認書	(第71期第1四半期) (第71期第2四半期) (第71期第3四半期)	自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日 自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日 自 平成29年10月1日 至 平成29年12月31日	平成29年8月14日 関東財務局長に提出。 平成29年11月14日 関東財務局長に提出。 平成30年2月14日 関東財務局長に提出。
(5) 臨時報告書 金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)に基づく臨時報告書			平成29年7月4日 関東財務局長に提出。
(6) 訂正発行登録書(社債)			平成29年5月2日 平成29年7月4日 関東財務局長に提出。
(7) 発行登録追補書類(社債)及びその添付書類			平成29年6月2日 平成30年6月6日 近畿財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年6月22日

阪和興業株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	田 中 基 博	Ⓔ
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	堀 内 計 尚	Ⓔ
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	竹 下 晋 平	Ⓔ

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている阪和興業株式会社の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益及び包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、阪和興業株式会社及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、阪和興業株式会社の平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、阪和興業株式会社が平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。

独立監査人の監査報告書

平成30年6月22日

阪和興業株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	田 中 基 博	Ⓜ
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	堀 内 計 尚	Ⓜ
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	竹 下 晋 平	Ⓜ

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている阪和興業株式会社の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第71期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、阪和興業株式会社の平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。

【表紙】

【提出書類】 内部統制報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の4第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成30年6月25日

【会社名】 阪和興業株式会社

【英訳名】 HANWA CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 古川弘成

【最高財務責任者の役職氏名】 ー

【本店の所在の場所】 大阪市中央区伏見町四丁目3番9号
(上記は登記上の本店所在地であり、実際の本社業務は、東京本社において行っております。)

【縦覧に供する場所】 阪和興業株式会社東京本社
(東京都中央区築地一丁目13番1号)

阪和興業株式会社名古屋支社
(名古屋市中村区名駅一丁目1番1号)

株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長 古川 弘成は、当社の財務報告に係る内部統制を整備及び運用する責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しています。

なお、内部統制は、判断の誤り、複数の担当者による共謀によって有効に機能しなくなる場合や当初想定していなかった組織内外の環境の変化や非定型的な取引等には必ずしも対応しない場合等のような固有の限界を有するため、その目的の達成にとって絶対的なものではありません。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成30年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しています。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しています。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社並びに連結子会社及び持分法適用会社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しています。なお、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断した連結子会社及び持分法適用会社については、全社的な内部統制の評価範囲に含めていません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、当社及び連結子会社は経営組織上の区分に基づき、取扱商品を考慮した部門を事業拠点とし、各事業拠点の売上高（連結会社間取引消去後）を合算していき、連結売上高のその概ね2/3程度の割合に達している事業拠点を重要な事業拠点としています。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として「売上高」「売掛金」「仕入高」「買掛金」「たな卸資産」に至る業務プロセスを評価の対象としています。また、持分法適用会社は、税金等調整前当期純利益に及ぼす影響が大きい事業拠点を重要な事業拠点としています。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として「売上高」「売掛金」「たな卸資産」に至る業務プロセスを評価の対象としています。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして個別に評価対象としています。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断しました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。

【表紙】

【提出書類】 確認書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の2第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成30年6月25日

【会社名】 阪和興業株式会社

【英訳名】 HANWA CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 古川弘成

【最高財務責任者の役職氏名】 —

【本店の所在の場所】 大阪市中央区伏見町四丁目3番9号
(上記は登記上の本店所在地であり、実際の本社業務は、東京本社において行っております。)

【縦覧に供する場所】 阪和興業株式会社東京本社
(東京都中央区築地一丁目13番1号)

阪和興業株式会社名古屋支社
(名古屋市中村区名駅一丁目1番1号)

株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長 古川 弘成は、当社の第71期(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。